

INFORMATION *Circular*

THE JAPANESE SOCIETY OF DEVELOPMENTAL BIOLOGISTS

■第31回大会大会後記	安部眞一	1
■大会印象記——懇親会について	千葉和義	2
■発生生物学会印象記		
熊本に今後の10年を期待しながら	桧枝洋記	2
■10年目の反省の総括	浅島 誠	4
■若者よ——10年目の反省に寄せて	岡田益吉	6
■学会発足当時およびDGD創刊とその後の経過	天野 實	7
■発生生物学会歴代会長・運営委員・過去の大会		13
■運営委員会議事録		15
■総会議事録		18
■日本学術会議報告	星 元紀	23
■平成10年度学会法人等連絡協議会の報告	八杉貞雄	25
■第14回国際発生生物学会開催について	竹市雅俊	26
■日本発生生物学会会則（改訂）		27
■教官公募		32
■研究助成金・各種募集案内		33
■集会案内		45
■会員移動		47
■入会案内		55

NO.90

AUGUST 1998

日本発生生物学会

〒192-0397 東京都八王子市南大沢 1-1

東京都立大学理学系研究科生物科学

会 長：〒 300 茨城県土浦市湖北 2 丁目 5 - 10
-0032 岡田益吉 (Tel: 0298-22-7348, Fax 兼用
e-mail: flyokada @ biol. tsukuba. ac. jp
drok7 @ da2. so-net. or. jp)

D G D 編集主幹：〒 739 東広島市鏡山 1 - 3 - 1
-0046 広島大学理学部遺伝子科学専攻
嶋田 拓 (Tel: 0824-24-7446)
(Fax: 0824-24-7498)
(e-mail: dgdedit @ ipc. hirosshima-u. ac. jp)

事 務 局：〒 192 東京都八王子市南大沢 1 - 1
-0397 東京都立大学大学院理学系研究科生物科学専攻
Fax: 0426-77-2559 (生物科学事務)
e-mail: jsdb @ comp. metro-u. ac. jp
(幹 事 長) 八杉貞雄 (Tel: 0426-77-2572)
(庶務幹事) 福田公子 (Tel: 0426-77-2572)
(会計幹事) 西駕秀俊 (Tel: 0426-77-2573)

学会センター：〒 113 東京都文京区本駒込 5 - 16 - 9
-8622 財団法人 学会事務センター
日本発生生物学会担当係 (Tel: 03-5814-5810)

日本発生生物学会への入退会、住所・所属変更、会費納入、および出版物（インフォメーション・サーキュラーなど）の郵送については、上記の日本学会事務センターに書面でお問い合わせ下さい。なお D G D につきましては直接、ブラックウェルサイエンス社にお願いいたします (Fax: +61-39349-3016)。

サーキュラーへの投稿募集

日本発生生物学会サーキュラーは会員の皆様の情報誌として年 3 回発刊されます。学会に対する提言、研究雑感、実験手法、学会見聞記、関連学会案内、書評等どのような内容でも結構ですので、是非事務局にお寄せ下さい。

第31回大会 大会後記

大会準備委員長 安 部 眞 一

今回の大会は、発生生物学会の発足以来3回目の「10年目の反省」の年という節目の時に熊本で開かせていただき、我々にとって光栄であり、意義深いものでありました。

今回は有能な実行委員会のメンバーに恵まれたため、また、寄付を集めて回るという骨の折れることをする必要もなかったため、私自身は比較的楽でありました。しかし、3日目のワークショップが終わった途端、それまでぴんと張っていた背中が丸くなり、「肩の荷が降りる」というのを実感いたしました。

演題数も一昨年の京都が268題、昨年の筑波が292題と増え、今年は311題と300の大会を突破しました。参加者も年々若い人が増えているように思いますし、まだまだ、発生生物学会は若い学会として伸び盛りであるという感を深く致しました。演題数が増えることは大変喜ばしいことですが、反面、プログラム編成の難しさが増してきます。今回ワークショップを1日目と3日目に行ったのですが、ワークショップはやはり大会前日と1日目の方が良かったかな、と思います。3日目の夕方には大部分の方がお帰りになるので、出席者の数がかなり少なくなったのではないかと思います。最終日は、飛行機の最終便のことをもっと考慮に入れるべきでした。

今回は、シンポジウムを1件とワークショップを4件行いました。ワークショップは、2件はタイトルを公募、2件をこちらでタイトルだけ「神経」と「生殖」と決めて、公募しました。「神経」と「生殖」には多数応募があり、その中から4題ずつ選ばせていただきました。こういうのは初めての試みでしたが、タイトルを決めて演題を公募すると、統一性を取るのが難しいと感じました。

会計的には、学会本部から大会援助費を増額していただきましたし、熊本は会場費など比較的安いので楽でした。また、広告、賛助費も江口吾朗熊大学長の御努力のおかげで、10社から頂きました。この場で厚く御礼申し上げます。その分、学生会員の参加費、懇親会費を安くする措置を取ることができました。

これは毎年のことですが、事前申し込みをしない人が多いため、正確な予算案を立てることができませんでした。そのため、各係の方にかなり無理をした計画をお願いしたように思われます。学会1月前（数週間）でもよいから、できるだけ正確な参加人数がわかれば収入の総額も予測でき、それに見合った運営ができるはずです。Eメールでも参加意思を確認するようなシステムを作り上げたほうがよいと思われます。

今後とも、大会開催校の負担が軽くなる方向で、なおかつ活発な学問的議論が行われるような大会になるよう会員が知恵を出し合い、協力されることを望みます。

大会印象記 —— 懇親会について

お茶の水女子大学・理学部・生物学教室 千葉 和 義

今年の発生生物学会では、例年と同様にレベルの高い発表と、活発な討論を楽ませてくださいました。また配慮の行き届いた運営の裏には、大会準備委員会皆様の十分なお準備とご尽力があったことと、推察いたします。本当にありがとうございました。

ただ一つ気がかりなこととして、懇親会に学生の人あまり参加してなかったことがあります。統計をとったわけではないのですが、年々減っているように感じます。確かに懇親会に参加するしないは自由なのですが、各層がまんべんなく集まるようになればと思うわけです。

2、3人に聞いてみたところ、懇親会代が高いという意見がありました。それならば、例えば500円程度に懇親会代を押さえて、軽いものにすると言う手があるかもしれません。どのみち懇親会の後、二次会に行く人も多いわけですから、おいしいものは二次会でというわけです。

懇親会会場で、このことについて次回大会委員長の団まりな先生にお話ししたところ、なんらかの対応策を考えていらっしゃるようでした。もしも学生の人シャイで躊躇しているようでしたら、来年は先生方からも、誘っていただくのはいかがでしょうか。

発生生物学会印象記 —— 熊本に今後の10年を期待しながら

桧 枝 洋 記

熊本といえば噴煙止まない雄々しい阿蘇、馬刺、高菜漬け、…… だが、私にとっては何と言っても、臨海実習で行った天草での楽しい思い出が忘れられない。もう15年ほど前のことだが、4次元で変化していく発生現象の複雑さにただ戸惑い、どう理解したらいいのか皆目分からなかったあの頃を雨の向こうに思い出しながら今大会に参加した。

一般演題は口演発表126題、ポスター発表178題でどちらも盛況だったと思うが、大会を研究発表・討論の場として実感したのは、皆さん（一応私も含めて）があれこれと突っ込んで活発にディスカッション・情報交換する声が響いていたポスター会場だった。ポスタ

一発表では時間をそれほど気にする必要がなく、また、背景・データ・考察が目の前に存在し続けているので、じっくりと考えてディスカッションすることができる。さらに、会場をつらつらと流し見している間に、自分の研究に直接関係なくても面白いと思う発表に出くわすことだってあるし、そこでのディスカッションによって多少なりとも視野を広げることができるであろう。大会を単なる挨拶の場や情報の一方的な垂れ流しの場ではなく、すべての参加者にとって有意義で、かつ、活発な研究発表・討論の場として維持するために、できれば一般演題のすべてをポスター発表にすることはどうかと感じた。そして、今大会のポスター発表は約45演題ずつに分けられ、説明時間が45分であったが、せめて昨年並み（約60演題ずつの90分）の人口密度と時間を確保した方がいいのではないだろうか。それくらいのゆとりが無ければ、折角のポスター発表がもったいない気がする。

ポスター発表には上記のような利点の他に、多くの研究者が参加する現代の大会では特別の価値があるように思う。というのは、もはや口演発表に、各研究者の個性や物の見方・考え方までが表出した発表・ディスカッションを求めるには無理がある。現代の発生生物学のテキストには移りゆく個体・器官・組織の姿に潜んでいる分子レベルのからくりについてこれでもかこれでもかというほどに書かれており、もう新しい見方・自分なりの見方はできないんじゃないかと思ってしまい、分かっていないことは何なのかが分からないほどである。しかし、増殖もすれば死にもし、情報を発信もすれば蓄え加工して受信もし、また、一寸先の姿は今の姿にあらず、さっきまで居たはずなのにもう居ないというようなまるで忍者のごとき細胞や細胞外マトリックスが集まってできている組織が、さらに別の組織と相互作用しながら形と機能を変えていく現象を扱う発生生物学はまさに複雑系の科学の見本市である。現代のアプローチは多くの成果をもたらしてはいるが、やはりひとつの見方に過ぎない。折しも今大会は10年を節目とする発生生物学会の新たなスタートの大会であった。阿蘇や天草の楽しみ方、眺め方が人それぞれであるように、発生という現象もそれぞれの個性的な目で観て、個性のぶつかりあう大会になってほしい。

10年目の反省の総括

浅 島 誠 (検討会委員長) (東大・院・総合・生命)

5月29日、第30回日本発生生物学会(熊本大会)で3回目の10年目の反省について総会がなされた。岡田益吉会長もこの点について述べられた。これは発生生物学会ができた当時から、10年目ごとに反省の総括を行って、「学会として activity や academic な存在感がなくなった場合には解放もやむを得ない」という創立時の規約の元に30回目にあたる今年が第3回目の年となった。この総会での「10年目の反省」に向けて、一年前から学会関係者(25名)の方々に色々なご意見をいただき、そのたたき台を「Circular」No.88(1997年12月号)に特集を組んで掲載した。その内容は実に多角的に日本発生生物学会に対して、ま直な意見と提言がなされている。それらをもとに、以下のようにまとめて総会にはかり、今後もこの日本発生生物学会を存続し、発展させることが望ましいとの総括がなされた。

1. 大会のあり方について

原則的には大会を引き受ける主催者(関係者)の自主性にまかせられるが、規模ややり方には、従来の方法を継続した方がよいとの意見が多かった。

- (a) 具体的には、口頭発表の会場は最大限3会場(できれば現状の2会場)にし、ポスターの部門を広く大きくするようにする。
- (b) 運営委員会での委員の案が紹介された。それは、発生生物学会の現状は、若い人が多いので、大会委員長なども思い切って若い人にやってもらうことも考えたらよいのではないかと。例えば、30代後半から40代前半の人に、大会委員長をお願いしてみてもどうか、などの意見があった。ただし、各々の大学等の事情もあるので、その辺は考慮して行ったらよいのではないかとこの意見も追加された。

2. DGD の国際化と質の向上

- (a) これには、歴代の DGD の編集主幹の並々な努力のおかげで、国際誌として質も向上し、現在の編集主幹の嶋田先生によれば、インパクトファクターも年ごとに上昇し、現在1.35であるとのことである。ただし、遺伝子ばやりの昨今において、それだけを扱うのではなく、DGD 独自の principle を大切にして行くことが、今後の日本の発生生物学会の発展にもつながると思われる。
- (b) 現在のカラーチャージをもう少し安くすることも、今後の検討課題である。
- (c) 質疑応答の中で、どうすればもっと質の高い国際誌になるのか、具体的な意見を

問いただきます質問がなされた。これに対し、DGD の編集関係者からは、とにかく多くの会員が積極的に良い論文を DGD に投稿することと review article を積極的に掲載してゆきたいとの意見があった。

3. 学会の財政基盤の確立

- (a) 過去10年間の前半は、学会は非常な財政難に陥り、学会の基盤そのものも危うい時代があった。DGD 基金の設立、テレホンカードの売り上げなど、多くの努力をしたが、常に慢性的赤字と直面しながら運営がなされていた。
- (b) そこで、江口前会長と岡田現会長らの英断で、DGD の発行所を Blackwell Science社に移してからは、財政がよくなり、大幅に財政難が解消されてきた。今は、ある程度安定化の方向にある。
- (c) このような中で、2001年に日本発生生物学会が第14回国際発生生物学会の大会を引き受ける時、学会からの援助があるのは大きなサポートになる。
- (d) ただし、最近のアジアの通貨不安もあるので、今後はその辺には十分に配慮して対応しておく必要がある。

4. 学会事務局の簡素化と委託

- (a) できるだけ事務局を引き受けるところが、負担にならないようにする。そのためには、事務委託など可能なものはできるだけ学会事務センターなどに委託化して、簡素化を行う。
- (b) 学会員にはサーキュラーなどを利用してもらって、意見を自由に述べてもらうようにする。

5. 若手研究者の職場の確保と研究環境の改善

- (a) 現在の発生生物学会には、非常に多くの若い優秀な研究者が沢山いる。彼らが将来も自分の能力を発揮して研究が出来るような職場の確保が急務となっている。今は多くの大学で大学院生が多く修了されるが、それに見合ったポストが不足してきている。
- (b) また、研究費や研究環境も一部では良くなっているものの、全体的にみれば、まだまだ不十分である。これらについても、十分に考慮し、努力していく必要がある。

6. 学会の歩み

この日本発生生物学会がどのようないきさつから発足し、現在に至っているのかについて、発起人のお一人である天野実先生のメモが披露された。これについては、学会員からの要望もあるので、別途、天野実先生にご執筆を依頼した。また、DGD の編集の流れについては、江口五朗先生にお願いすることにした。

10年目の反省にあたって、上記のような総括がなされた。今後の10年を考えた時、今とはすっかり様変わりしていることであろう。サーキュラーの中に書いてあるような、Intergrated Development Biology、あるいは Cell や個体の再評価に向かっていくのか、何か大きなブレイクスルーが起こっているのか、今後の発展を見守りたい。

若者よ —— 10年目の反省に寄せて

岡 田 益 吉

「大会の開催は若い人が中心となってやるようにして欲しい」、若手の代表と思っていた運営委員の一人の発言を聞いて、初めは少し面食らったが、ややああって、これこそ私が無意識に待ち続けていた言葉であると気づいた。

今年は10年毎の反省の年である。日本発生生物学会の活動を、より有意義にするためにはどうしたらよいか、多くの方々から貴重なご意見を頂いた。発生生物学の来し方を眺め前途を見つめて研究の方向を論じておられる方々は、年齢のことなど全く意識しておられないようにお見受けする。しかし、可成りの数のご意見の中に、「裾野を広げる」、「シンポジウムの公募」、「古い概念に捕らわれない」、「新しい視点・発想」、「学会運営の効率・省力」等々、若者の活動をイメージしたに違いない表現が至る所に見受けられた。

ここで、発生生物学の研究の発展は若い研究者の活躍にかかっている、などと申し上げる気は毛頭ない。それは当然のことであり、優れた研究をしている若い研究者を何人も知っているし、またそれと同時に、研究は若い人達だけの特権ではないとも思うからである。今、「若者よ」などという表題で書いているのは学会活動についてである。私はこれまで、学会の機能の一つは、会員の研究活動が活発に、滑らかに行われるようにお手伝いすることである、というようなことを話したり書いたりしてきた。しかし、この考えには難点が

ある。それは、学会と、会員とを別の主体として捕らえ、会員を受け身の立場にのみ置いているからである。確かに、学会活動の多くは、運営、DGD編集、の2つの委員会、会長、編集主幹、何人かの幹事、などの活動によって支えられている。しかし、学会は、これらの人達が、他の会員のお手伝いをするために存在するものでは決していない。30年前に、発生生物学という学問を発展させたいという強いモチベーションを持った人達が集まって、日本発生生物学会が誕生した。この時には、学会が会員のお手伝いをするのではなく、会員と学会とは同一の主体であったに違いない。しかも、学会の担い手は当時の若手であった。

では、今はどうか。いくつかの分野の研究の発展には、優れた若手の力が頼もしく認められる。2001年に京都で開催されることになった国際発生生物学会には、多数の若者が参加して、優れた研究を発表してくれることを確信している。一方、学会と会員の関係はどうか。若手研究者が余分なことに煩わされずに、充分研究に打ち込んで欲しい、という(多分大部分のシニア研究者の)善意が改革を阻んだのではないかと反省している。私の心の奥には、研究の主体となる人達が学会の運営に関与するべきである、という思いが常に潜んでいた。奥に潜んでいた考えが表面に現れてきたところで、つけ加えたい。若者よ、人が何かをしてくれるのを待っていないで、自らの研究を進展させるために最適の環境をつくるためには何が必要か。日本国は、また学会は何をすべきか。考えて、行動して欲しい。

学会発足当時及びDGD創刊とその後の経過

広島工業大学 天 野 實

I. 日本発生生物学会発足当時

1968年に初めて、第一回日本発生生物学会が開催された。私が岡山大学医学部解剖学教室から国立がんセンター研究所細胞生物学研究室に着任してから五年目だった。その前の年に私は発生生物学会の発起人会に出席してほしいという手紙を受取っていたので、都立大学の団先生の部屋へ出かけて行った。とにかく真剣に日本の今までの生物学関係の学会とは違う形で、古い分野別の垣根を取り払い色々な分野の人が一緒になって生物の発生現象、細胞の分化等の問題を考え研究を推進しようとしておられることが皆さんからひしひ

しと伝わってきた。

私は広島文理科大学の発生学教室を出た後、核酸研究のパイオニアの一人である山口県立医科大学（現在の山口大学医学部）の柴谷篤弘先生の研究室でDNAの半保存生合成の研究をしていた。それが縁でカナダ・モントリオール・マギル大学解剖学教室のC.P.Lebland先生の所でPh.D.の学生になりラジオオートグラフを用いてRNA合成の研究をした。私は1960年に核小体とクロマチンでRNAが同時に合成されており、細胞質へ移行することをExp. Cell Researchに発表した。帰国後1965年には蛋白質、核酸・酵素と、実験形態学誌（名古屋大学の学会の講演）に「核小体のRNA合成」の総説を書いていた。村松正実先生の論文に少し遅れたけれども純国産の分離核小体の研究結果を1967年にExp. Cell Researchに発表したのが発生生物学者の目にとまっていたので、私が発起人会の段階で呼ばれたのであろうと思う。これより少し前、私は米田満樹先生が校長をしておられた「生物物理夏の学校」の講師として八ヶ岳の麓に行った時癌細胞の核小体が正常の細胞と比較すると明らかに不規則な形で大きいこととRAN合成の活発な部位であることを話した後で、アフリカツメガエルの核小体が出来ない突然変異体では発生の初期遊泳胚の段階で発育が停止することが発見された話（今ではr-RNAの新たな合成が出来ない事は誰でも良く知っている）をし、核小体が重要な核内構造物であると話した事を覚えている。この様なことから発生学分野の方々が私に注目されたのだらうと思う。

私は日本で大学時代に、核酸の研究は学会の壁、研究室間の高い壁に遮られて不可能だったという苦い経験があり、この新しい学会設立の趣旨に即座に賛同し参画することにした。

発会式の時、発生生物学会は今までの動物の発生（ウニ、ヒトデ、カエル、イモリ、ニワトリ）のみを扱うのではなく、生物すべてについての発生現象を扱う研究者が一堂に会して切磋琢磨する学会にしたいと趣旨説明で強調された。具体的には、動物関係の方々の外にもガン細胞の研究をしている私が準備段階の時から呼ばれたし、細菌の鞭毛形成、植物の成長、分化、器官形成の研究者は必ず一緒に活動することが強調された。植物関係では発足当初からファイトクロームの専門家の古谷雅樹先生が会員であり、会の運営やDGDの内容充実、欧文誌の日本での状況をPlant and Cell Physiologyとの比較などで運営委員、編集員とのメンバーとして毎回必ず貴重な意見を述べられたことは今でも強く印象に残っている。

発生生物学会の創立総会はまだ若かった江口吾朗先生が議長を勤められた。新しい皮の袋に新しい酒を入れ、芳醇な酒に作り上げるのだ。とにかく組織は出来たが、とかく年がたつにつれ組織は硬直し老化してしまうということが起こるのが世の常であるから10年毎に反省する事を規約に明記せよとの発言が前田靖男先生ら当時の若い方からあり、万雷の

拍手で採択されたと記憶している。

私は1953年大学を卒業した後、動物学会、生化学会、細胞化学シンポジウム（現在の細胞生物学会）、がん学会、組織化学会、解剖学会に入会して活動して来た。これらの学会と発生生物学会とを比較してみると、少なくとも発足後十年間位までは明らかに違っていたと思う。一言で言えば、ゆったりとした雰囲気であり、お年寄りの大先生も若い人たちと気楽に話し合える学会というものであった。このことは日本の学会ではなかなか得難いもので、アメリカ社会で長く生活され、良い意味でのリベラリストだった団勝磨先生と大変気さくな団仁子先生のお人柄が強く影響していたと思う。

II. DGD印刷所変更

1998年第31回熊本の大会で江口先生が山田常雄先生の話をした時にも出たようにEmbryologiaは名古屋で発行されていた。Embryologiaの発刊あるいは、Embryologiaが学会誌としてのDGDに引き継がれた経緯等については江口先生が語られるとのことである。DGDは当初、初代編集主幹を勤められた相山正雄先生を中心に名古屋大学の方々が印刷、製本、配布の業務をしておられた。その頃は財政面での基礎作り、業務の個人的負担の解消が重要課題と考えられた時であった。その後、相山先生から編集主幹を引き継がれた岡田節人先生が日本中の色々な学術雑誌の印刷屋を比較検討された結果、広島市内で主に広島大学の紀要の印刷をしていた「大学印刷株式会社」を見つけられ細かい項目にわたっての交渉をしておられた。このことは私の全く知らないことだった。私が1976年3月に広島大学総合科学部へ転勤することが決まった時に「天野はん農（ワシ）と一緒に心中してくれ」と言われて驚いたことが今でもはっきり記憶に残っている。何の事かと聞くと、斯く斯く然然DGDの印刷を広島の印刷屋に移したいのだ、原稿持ち込み後の一切の仕事をやってくれとのことだった。学会誌それも欧文誌ともなれば外国人との文書のやりとり、スペルのチェック、校正、特に生物関係の写真のプリントには色々なむづかしい事が起こり得ることは直ちに想像出来るし、困ったなとは思いつつ、岡田先生と一対一で話していると断固断ることも出来ず、誰かがやらねばならない事だから、しばらくの間軌道に乗る迄御手伝いしようと思った。当時のDGD編集主幹は岡田節人先生がしておられ、送られて来た論文についてのレヴユウアーの意見聴取、採択の決定、団仁子先生の英文校閲までの全ては京都で行われていた。

論文の字数、表、写真等の大きさから推察して一冊分のDGD原稿は、大変貴重な書類で郵送中に万一紛失したら大変だし、配布する期日を出来るだけ早くしなくてはならないこともあって、当時学生だった漆原秀子先生が毎回京都から広島へ新幹線で持って来られた。予定の期日迄に仕上げ配布することは、色々な思わぬ事が起こり非常に困難なことで

屢々会員の皆様に迷惑をかけたことと思う。数年間の仕事と思って始めたが何と編集主幹・米田満樹先生、編集幹事・加藤憲一先生になるまで続いてしまった。勿論この間郵送の安全性、きれいなコピー、FAX、E-mail等々仕事のやりかたは変わってきた。丁度生命科学関係の仕事をしてきたワイフが国立がんセンター研究所の公務員定員削減で退職した後、田舎の広島で専業主婦をしていたのでこれらの仕事の手助けをしてくれたからこそ可能だったと思い感謝している。振り返ってみると大変な苦勞だったが、活版印刷からオフセット、コンピュータ制御と印刷技術が進歩した事などの社会勉強も含めて、1976年当時には思いもしなかった体験だった。

Ⅲ. DGD発行についての諸問題

学会の機関誌としての刊行物に対する文部省からの補助金を受けるためには決められた年間頁数±20%のものを3月末日までに巻の最終号を必ず配布し終えることが必要で、このことを達成するためには色々な作業の段階での普段の努力が必要だった。

英文のチェックを団仁子先生にお願いした後の文章を見るにつけ、つくづく感心したことがある。出来るだけ日本人の英語の文章をいじらないで、正確に意味が伝わるように改めておられた。このことは日本人をよく知り、著者に対する思いやり、やさしい心遣いの賜だと常に嬉しく思ったものだ。

1979年に団仁子先生が急逝されて、さてDGDの英文校閲をどなたに頼もうかと相談したことが思い出される。日本の他の学会が発行している欧文誌の英文チェックでは色々なむづかしい問題が起こっていることは屢々耳にしていたし、困ったなと思っていた時に別の学会で岡田節人先生と一緒に徳島大学の市原明先生に御会い出来た。市原先生の奥様である市原エリザベス先生のことを思いだしDGDの英文校閲をお願いして頂くように何度も何度も頼みした。実は阪大の微研Journal等の英文校閲で大変お忙しいとのことだったので年間の論文数を決めて、それ以上のことは決してお願いしないという条件で何とか解決出来たと記憶している。DGDの英文校閲は団仁子、市原エリザベス先生というすばらしい先生にめぐまれて、本当に幸運だったと思う。

印刷所から初稿が出来てから著者に校正を二週間以内に返送して下さいとお願いしてもなかなか返ってこないことがある。一冊を作るためには論文の配列順序を考え各号で頁数にあまり差がないように考慮しなければならなかった。しかし最終号は文部省の補助金の事もあり、いつまでも待つわけにはいかない。南米の著者の場合、いつまで待っても返ってこないし、電話で催促したが、届いていないとの返事、とにかく私の責任でとの了承をとり仕事を進めたら、それから三ヶ月位してやっと届いたという事もあった。日本国内では考えられないようなトラブルも起った。細心の注意を払って作り上げても発送後にミス

が見つかることがある。次号にErrataを挿入する時は本当に心苦しかった。

IV. 学会の財政基盤の確立

DGDを作り全員全てに配布することは経済的に大変な負担である。何とか安く作れないものか（外国の印刷所に移すことも含めて）、DGD購読会員とCircularのみを受け取る会員とを作れないものかと色々な可能性を運営委員会では何年にもわたって議論してきた。DGD編集委員会は良い雑誌を作ることに専念すればよい。財政的なことは運営委員会の仕事だ、とはいっても両方の委員会の委員を兼ねておられる方も多くて屢々財政的な話題で白熱した議論になったものである。

具体的には、岩波書店から発生生物学関係の本を出し、執筆者への謝礼を少しにして特別会計のDGD基金に入れることも考え実行されたこと記憶している。又特別に寄付を集めて特別会計のDGD基金に組み入れたことも二度はあったように思う。少しでも赤字が出たときの足しにしようと黄色のドイツ語花文字のテレホンカードを作って販売し収益を特別会計に組み入れたこともあった。

V. 学会運営の近代化

我々の発生生物学会には会長一名、事務局に幹事長、庶務幹事、会計幹事が各一名任命されているが、各々大変な仕事量であった。会員の出入りの管理から会費納入、Circularの編集、発行等々である。

三菱化成生命研の加藤淑裕先生と山崎君江先生がこれらの仕事をしておられた時に、何とかしなければと真剣に方策を話し合った。たまたま日本学会事務センターが作られ、日本動物学会、日本生化学会が事務の仕事を受託するとの話があり発生生物学会も委託することになったが、細かい点の交渉は非常に大変だったと知らされた。具体的な折衝に当たられた加藤、山崎先生には心から感謝の気持ちを述べておきたい。

次に、DGDを大版にし且つBimonthlyにして名実ともに国際的な雑誌にしようとの長い間の懸案を実行する機運が盛り上がって来た。第一の心配は年間の良い原稿が確保出来るだろうか、財政的に可能だろうか、外国の印刷所で安く出来るところはないだろうか等々以前からの問題を議論して決断したことがなつかしく思い出される。雑誌表紙のレイアウトはどうしよう、ドイツファンの私などは昔のドイツ語花文字にすごい愛着があるのだが、今からはやはり……とか、論文一頁目の右上のDGDのカットはどうしようか、表紙の色は黄色でよいか、文章の字体は何にするか、Key wordsは等々大版二段組にするについては大変な作業が行われた。

もう一つの重大な決断は、国際的な雑誌になるためには世界的規模での広告宣伝配布網の確立が必要だということである。早稲田大学安増郁夫先生の時だったと思うが、

Academic Pressにやらせたらどうだろうとの話になり実現することになった。会計上の契約はドル立てにした。その後、円ドルの為替相場が急激に変動することなど誰も想像できなかった。筑波大学での大会の時に、安増先生達と当時の公害研究所の所長で学術会議の委員をしておられた江上信雄先生を訪れて文部省からの学術刊行物補助金の増額をお願いした。外国への配布先を持つ学術雑誌への増額は当然考えてくれるものと思っていたが実現しなかった。経済に弱い私などにはよい社会勉強になった。

VI. DGDブラックウエル社への移管

この寄稿のIVでのべた財政基盤の確立はDGDを製作するのに少しでも安くと昔から真剣に考えて来られた江口吾朗先生の筆舌に尽しがたい努力の結果、やっとブラックウエル社へ移すことが可能になったと思っている。学会員の意向をアンケート調査し、編集権まで取られてしまうとの一部会員の持ってた危惧の無いよう、色々な細かい点を交渉し決着まで持ってこられた次第である。

私の多言は無用、1994、Dec. Circular No.79の江口先生の「退任に当たって」を熟読玩味して頂きたい。

歴代の会長、幹事、委員や日本発生生物学会とDGDを立派なものにしたいと思われた多くの方々の努力によって現在のようなものにまで発展して来たと思う。

苦しいことも多かったが反面非常に楽しいこともあり、特にDGD編集とのかかわりで多くのすばらしい先輩、同僚、後輩の方々と知り合いになれた。加藤淑裕先生の時には丸の内の三菱ビルのなかで、会議の後、立派な日本間で関東風がいいとか、いや関西風が一番だとか言いながらおいしいスキ焼きを楽しんだ。金谷晴夫先生の時には菅島の臨海実験所で会議を終えた後、朝まで酒を飲み、翌日は岡田節人先生の真赤なスポーツカー・アルファ・ロメオで山名清隆先生と一緒に伊勢志摩のドライブを楽しんだ事などが思い出される。

日本発生生物学会の会員の皆様、今後ますます研究に精進され、立派な論文をDGDに投稿されるよう祈って筆を置く。

日本発生生物学会歴代会長・運営委員

自	1968	1971	1973	1975	1977	1979	1981
至	1970	1972	1974	1976	1978	1980	1982
会長	団 勝麿	団 勝麿	梶山 正雄	梶山 正雄	団 勝麿	岡田 節人	岡田 節人
運営委員	天野 実	天野 実	石崎 宏矩	石崎 宏矩	江上 信雄	天野 実	天野 実
	飯野 徹雄	飯野 徹雄	江上 信雄	江口 吾朗	江口 吾朗	石崎 宏矩	石崎 宏矩
	江口 吾朗	江上 信雄	遠藤 善之	岡田 節人	大西 英爾	江上 信雄	江口 吾朗
	岡田 節人	江口 吾朗	大西 英爾	岡田 善雄	岡田 節人	大西 英爾	岡田 益吉
	岡田 善雄	大西 英爾	岡田 善雄	岡崎 嘉代	加藤 淑裕	岡崎 嘉代	岡田 善雄
	岡崎 嘉代	岡田 節人	金谷 晴夫	酒井 彦一	金谷 晴夫	岡田 善雄	片桐 千明
	梶山 正雄	金谷 晴夫	川上 泉	梶山 正雄	黒田 行昭	片桐 千明	酒井 彦一
	竹内 郁夫	川上 泉	黒田 行昭	波麿 忠雄	酒井 彦一	加藤 淑裕	塩川光一郎
	日野 精一	黒田 行昭	小嶋 学	平本 幸男	竹内 郁夫	金谷 晴夫	鈴木 義昭
	古谷 雅樹	梶山 正雄	平本 幸男	樋渡 宏一	古谷 雅樹	黒田 行昭	竹内 郁夫
	前田 靖男	竹内 郁夫	樋渡 宏一	丸山 工作	山名 清隆	塩川光一郎	平本 幸男
	柳島 直彦	林 雄次郎	丸山 工作	毛利 秀雄	米田 満樹	樋渡 宏一	星 元紀
	柳田 友道	古谷 雅樹	毛利 秀雄	柳島 直彦	渡辺 浩	毛利 秀雄	水野 丈夫
	山名 清隆	山名 清隆	柳島 直彦	山名 清隆		米田 満樹	毛利 秀雄

1983	1985	1987	1989	1991	1993	1995	1997
1984	1986	1988	1990	1992	1994	1996	1998
加藤 淑裕	加藤 淑裕	安増 郁夫	安増 郁夫	江口 吾朗	江口 吾朗	岡田 益吉	岡田 益吉
江口 吾朗	天野 実	天野 実	江口 吾朗	浅島 誠	浅島 誠	阿部 眞一	相沢 慎一
岡田 節人	石崎 宏矩	石崎 宏矩	岡田 節人	天野 実	阿部 眞一	井出 宏之	浅島 誠
岡田 益吉	大西 英爾	江口 吾朗	岡田 益吉	片桐 千明	天野 実	江口 吾朗	上野 直人
金谷 晴夫	岡田 節人	岡田 益吉	近藤 寿人	近藤 寿人	井出 宏之	黒岩 厚	江口 吾朗
酒井 彦一	片桐 千明	片桐 千明	酒井 彦一	塩川光一郎	岡田 益吉	近藤 寿人	片桐 千明
杉山 勉	黒田 行昭	加藤 淑裕	佐藤 矩行	嶋田 拓	片桐 千明	佐藤 矩行	黒岩 厚
鈴木 義昭	塩川光一郎	黒田 行昭	嶋田 拓	竹市 雅俊	佐藤 矩行	嶋田 拓	近藤 寿人
竹市 雅俊	杉山 勉	佐藤 矩行	鈴木 義昭	中辻 憲夫	塩川光一郎	白井 浩子	嶋田 拓
竹内 郁夫	竹市 雅俊	塩川光一郎	竹市 雅俊	長浜 嘉孝	中辻 憲夫	竹市 雅俊	竹市 雅俊
平本 幸男	団 まりな	鈴木 義昭	東中川 徹	東中川 徹	長浜 嘉孝	団 まりな	団 まりな
星 元紀	東中川 徹	平本 幸男	星 元紀	安増 郁夫	藤澤 肇	東中川 徹	中辻 憲夫
水野 丈夫	毛利 秀雄	星 元紀	米田 満樹	山上健次郎	星 元紀	藤澤 肇	長浜 嘉孝
山名 清隆	山名 清隆	水野 丈夫	山上健次郎	山名 清隆	八杉 貞雄	星 元紀	中村 春和
米田 満樹	米田 満樹	毛利 秀雄	山名 清隆	米田 満樹	安増 郁夫	八杉 貞雄	西田 宏記

日本発生生物学会大会

回数	開催年	開催日(白)	至	開催地	委員長
1	1968			東京	
2	1969	5月31日	6月1日	金沢	木戸 哲二
3	1970	3月27日	3月30日	大阪	天沼 昭
4	1971	8月25日	8月26日	福岡	川上 泉
5	1972	8月28日	8月30日	東京	古谷 雅樹
6	1973	9月3日	9月5日	京都	岡田 節人
7	1974	6月20日	6月22日	名古屋	梶山 正雄
8	1975	5月29日	5月30日	仙台	樋渡 宏一
9	1976	5月27日	5月29日	大阪	岡田 善雄
10	1977	5月27日	5月28日	東京	山名清隆・加藤淑裕
11	1978	5月24日	5月26日	三島	黒田 行昭
12	1979	6月27日	6月29日	札幌	原田市太郎
13	1980	6月20日	6月22日	広島	菅野 義信
14	1981	5月12日	5月14日	京都	藤田 哲也
15	1982	5月27日	5月29日	東京	平本 幸男
16	1983	5月11日	5月13日	松山	石川 優
17	1984	5月12日	5月14日	熊本	藤本十四秋
18	1985	5月9日	5月11日	名古屋	大西 英爾
19	1986	5月15日	5月17日	筑波	渡辺 浩
20	1987	5月28日	5月30日	京都	米田 満樹
21	1988	5月26日	5月28日	山形	及川 胤昭
22	1989	6月24日	6月26日	札幌	片桐 千明
23	1990	5月24日	5月26日	広島	天野 実
24	1991	5月23日	5月25日	東京	安増 郁夫
25	1992	5月28日	5月30日	横浜	浅島 誠
26	1993	5月26日	5月28日	福岡	山名 清隆
27	1994	5月15日	5月27日	仙台	井出 宏之
28	1995	5月29日	5月31日	名古屋	藤澤 肇
29	1996	5月23日	5月25日	京都	佐藤 矩行
30	1997	5月27日	5月29日	筑波	平林 民夫
31	1998	5月28日	5月29日	熊本	安部 眞一
32	1999	5月28日	5月29日	神戸	団 まりな

運営委員会議事録

1998年5月27日 午後6時～9時 熊本産業文化会館第1会議室

出席者 (会長) 岡田益吉
(運営委員) 相沢慎一、浅島誠、上野直人、江口吾朗、片桐千明、黒岩 厚、
近藤寿人、嶋田拓、竹市雅俊、団まりな、中辻憲夫、長浜嘉孝、
仲村春和、西田宏記
(学術会議会員) 星 元紀
(大会準備委員長) 安部眞一
(会計監査委員) 高宗和史
(事務局) 八杉貞雄、西駕秀俊、福田公子

会長挨拶に引き続き、報告、審議に入った。

報告事項

大会委員長挨拶 (安部)

- ・演題数 311題 (うちポスター178)。年々増えている。
- ・ワークショップ1、ワークショップ4を予定。
- ・懇親会へ賛助費を回すことで学生の懇親会費を下げた。
- ・当日参加の人数が把握できず不都合だったので、今後会員には参加の意思表示を事前にとるのがよい。

事務局報告事項 (八杉、福田)

- ・本年度学会推薦で助成金を獲得した人の氏名が報告された。
- ・合衆国CCCとCCC電子アクセス契約を結んだ。DGDの電子アクセスによるコピーに対するチャージの契約である。
- ・現会員数 (平成10年5月20日現在)

国内 正会員 1041名

学生会員 330名

賛助会員 6社

海外 正会員 40名

学生会員 1名

合計 1398名

- ・会費未納で退会になった人には再入会の際に未納分を支払ってもらうことにした。
- ・名簿作成の日取りが説明された。今回は氏名、所属の英語表記を併載する。会員の手元にはサーキュラー90号とともに届く予定。

DGD編集会議報告（嶋田、星）

- ・Impact Factorをあげるため、レビューを増やしたい。
- ・カラーチャージの値下げを皆に広めて欲しい。
- ・投稿数をより増やすため、カラーチャージはできれば近い将来0に近づけたい。
- ・2001年国際発生生物大会のabstractをDGDに載せることにした。

学術会議報告（星）

- ・生物系の学会で学会連合を作る動きがある。
- ・クローン動物に関しての議論が進んでいる。（会誌「学術の動向」に特集あり。）
- ・大学共同研究施設費の削減について要望を提出した。
- ・理学総合連絡会議が発足し、現場の研究者の意見を広く取り上げることを確認した。

生物科学学会連合報告（岡田）

- ・生物学系の共通の問題を話し合うため、1000人以上の会員数の学会が集まり、生物科学学会連合を発足させた。
- ・国家公務員の生物分野の合格者を、各省庁はもっと採用するように要望書を提出した。
- ・各学会で意見が違うため、要望書の最後に賛同する学会名を記すことにした。
- ・生物全体の話題があれば申し出て欲しい。

その他

- ・（岡田）平成11年3月に行なわれる国際シンポジウム「両生類生物学の研究最前線」（吉里先生）の後援を頼まれ、承諾した。

審議事項

1997年度決算と1998年度予算案について（西駕）

- ・ 1997年度決算について報告があり（表 1 参照）、高宗会計監査委員からの会計監査報告があった後、承認された。
- ・ 1998年度予算案について説明があり、（表 2 参照）承認された。
- ・ 収入は200万円減。繰越金の減とDGDページチャージを収入からはずしたことになる。（DGDページチャージは従来もDGD刊行費から相殺されており、実情に即して変更した。）
- ・ 支出：新しい項目はDGDカラーチャージ学会負担分、名簿作成料、選挙諸費用。
- ・ 支出：増やした項目は事務局経費、DGD編集費。
- ・ 支出：減らした項目は特別会計、予備費。

科学研究費審査員について

科研費の審査員候補が投票によって選出された。

総会議事次第（八杉）

総会議事次第案が承認された。

会長および運営委員選挙について（八杉）

選挙日程の説明があり、承認された。第 1 回の投票締めきりは 8 月 31 日である。

1999年度の大会について（団）

- ・ 開催地 神戸、甲南大学
- ・ 開催日 1999年 5 月 28 日（金）～30 日（日）
- ・ 大学で開催のため開催曜日が普段と違う。プログラムの組み方も変わるかもしれない。

2000年の学会について（岡田）

高知大学の川村先生が学会開催の依頼を快諾された。今後も若い人に開催を依頼し、斬新なアイデアを期待したい。

国際発生生物学会大会準備に関して

- ・ 竹市大会準備委員長から現在の状況について説明があった。
- ・ 日時 2001年 7 月上旬から中旬の予定。
- ・ 場所 いくつかの候補地があるが、京都が最もよさそうである。

- ・大会準備副委員長は浅島先生、岡田先生、長浜先生にした。
- ・総務委員長（佐藤矩行）：本大会を学術会議主催にする申請書（今年12月締めきり）をまとめている。
- ・プログラム委員長（近藤）：各分野の委員は若手中心にする。海外からの招待講演者の招待費用負担軽減のため、さまざまな手段を考えている。
- ・財務委員長（浅島）：現在の見積りについて説明があった。
- ・募金委員長（岡田）：副委員長は星先生である。
- ・広報、渉外委員長（長浜）：inter netを活用し、郵送の手間を少なくしたい。広告を発行関係雑誌に載せる。home pageをつくる。
- ・日本発生生物学会として国際発生生物学会大会準備委員の活動のために特別会計から支出することが承認された。
- ・アジアで行なう学会なので特別にアジア各国の研究者に出席を呼びかけることや、旅費の援助について議論がかわされた。

第31回 日本発生生物学会総会議事録

日時：1998年5月29日 午後5時30分～6時30分

場所：熊本市産業文化会館大会議場

議長選出（八杉）

会場から熊本大学の阿部訓也会員が推薦され、満場一致で同会員を議長に選出した。

会長挨拶（岡田）

大会準備委員長挨拶（安部）

事務局報告（八杉）

- ・会員数：国内 正会員 1041名、学生会員 330名、賛助会員 6社
- 海外 正会員 40名、学生会員 1名
- 合計 1398名

- ・学会推薦で助成金を獲得した会員の報告があった。

編集委員会報告（嶋田）

- ・投稿数をあげるため今年度からカラーページチャージを値下げした。
- ・Impact factorは徐々に上がっているが、もっと上げるためがんばりたい。

学術会議報告（星）

- ・生物系の学会で学会連合を作る動きがある。
- ・クローン動物に関しての議論が進んでいる。
- ・大学共同研究施設費の削減について要望を提出した。
- ・理学総合連絡会議が発足し、現場の研究者の意見を広く取り上げることを確認した。

審議事項

- ・1997年度決算（西駕）
1997年度決算が報告され（表1参照）、高宗和史会計監査委員からの会計監査報告の後、承認された。
- ・1998年度予算案（西駕）
1998年度予算案が説明され（表2参照）、承認された。
- ・会長および運営委員選挙について（八杉）
選挙管理委員および選挙の日取りについて説明があり、承認された。選挙管理委員は委員長北村邦夫会員、竹内隆会員、橋本有弘会員（三菱化成生命科学研究所）。
7月中に選挙関係書類が会員に郵送され、第1回投票締めきりは8月31日。
- ・会則付則の付加（岡田）
日本発生生物学会が国際発生生物学会の傘下に入ったことから、2名のboard memberを日本発生生物学会から出すことが可能になった。その規定がないので会則付則、申し合わせ事項に以下の項を付け加えることが提案され、承認された。
4、国際発生生物学会のboard memberは運営委員会において選出する。
- ・国際発生生物学会大会の準備について（岡田）
- ・2001年国際発生生物学会大会を日本発生生物学会で引き受けることが承認された。
- ・準備組織は現事務局とは独立する。
大会準備委員長 竹市雅俊
プログラム委員長 近藤寿人
財務委員長 浅島 誠（大会準備副委員長）

総務委員長	佐藤矩行
広報・渉外委員長	長浜嘉孝（大会準備副委員長）
募金委員長	岡田益吉（大会準備副委員長）

- ・開催地は京都が有力。
- ・日時は2001年7月上旬～中旬
- ・2001年は日本発生生物学会は単独では行なわず、国際発生生物学会大会と合同開催となる。
- ・学会会議主催とするための申請書を作成中。
- ・学会から活動準備金の支出が承認された。

10年目の反省（浅島）別紙参照。

来年度大会委員長挨拶（団）

- ・32回大会は関西の複数の大学の協力のもと神戸、甲南大学で行なう。
- ・1999年5月28日（金）～30日（日）、いつもと違う曜日で行なう。

その他

- ・高橋淑子会員からDGDの質をあげる具体策について質問が出た。

嶋田編集主幹 質の高い記事を扱う論文を載せることで個性を出したい。

岡田会長 研究室を主催する先生がその研究室で出したいい論文をDGDに出す努力をすべきではないか。

星編集委員 よい論文にはよい著者とよい読者が必要。

レビューを毎掲載せられるほど増やしたい。

1997年度決算（表1）

一般会計

収入		支出	
摘要	金額（円）	摘要	金額（円）
学会費	12,176,500	DGD 刊行費	7,509,519
賛助会費	60,000	DGD 編集費	2,525,881
文部省学術費刊行補助金	6,800,000	学会事務センター業務委託費	1,531,974
広告代	670,000	発送費	1,829,380
バックナンバー	16,200	諸経費	66,892
大会校より寄付	2,126,398	DGD 保管料	131,670
テレホンカード売り上げ	12,000	サーキュラー印刷費	1,382,700
雑収入	501	要旨集印刷費	852,437
利息	1366	大会援助費	900,000
		運営委員会経費	385,685
		事務局経費	330,608
		特別会計	6,000,000
		次年度繰越金	5,882,549
小計	21,862,965		
前年繰越金	7,466,330		
合計	29,329,295	合計	29,329,295

特別会計

摘要	金額（円）	備考
特別会計	6,000,000	1996年より
特別会計	6,000,000	1997年一般会計より
合計	12,000,000	

1998年度予算案（表2）

一般会計

収入		支出	
摘要	金額（円）	摘要	金額（円）
学会費	12,000,000	DGD 刊行費	7,200,000
賛助会費	400,000	DGD 編集費	2,500,000
文部省学術誌刊行補助金	6,300,000	DGD カラー編集費	800,000
広告代	400,000	会員名簿作成費	2,100,000
利息	10,000	選挙諸費用	250,000
		学会事務センター業務委託費	2,000,000
		発送費	2,000,000
		DGD 保管料	150,000
		サーキュラー印刷費	1,000,000
		要旨集印刷費	900,000
		大会援助費	500,000
		運営委員会経費	300,000
		事務局経費	650,000
		国際発生生物学会へ	150,000
小計	19,110,000	予備費	1,492,549
前年繰越金	5,882,549	特別会計	3,000,000
合計	24,992,549	合計	24,992,549

特別会計

摘要	金額（円）	備考
特別会計	6,000,000	1996年より
特別会計	6,000,000	1997年一般会計より
特別会計	3,000,000	1998年一般会計より
合計	15,000,000	

日本学術会議報告

第4部会員 星 元 紀

1. 2月3日に生物科学研連（委員長 内田久雄）が開催され、以下の報告ならびに討論が行なわれた。

- 1) IUBS 昨年11月に台北で開催されたIUBS総会に日本代表として出席した岩槻邦男委員から、同総会の報告があった。（日本からは星が理事となることなど）
- 2) 学会連合の提案 丸山工作委員より、日本生化学会、日本分子生物学会、日本植物学会、日本動物学会の4学会会長連名による「生物科学・学会連合（仮称）」結成の呼びかけが、関連9学会（日本遺伝学会、日本細胞生物学会、日本植物生理学会、日本神経科学学会、日本神経化学会、日本生態学会、日本生物物理学会、日本発生生物学会、日本免疫学会）会長に送付される予定である旨の紹介と、最近の状況説明がなされた。また、学会連合のさまざまな可能性について討論した。
- 3) ガイアリスト21計画に関する最近の動きを星委員が説明した。
- 4) 細胞生物科学研連委員長の矢原一郎委員より、クローン動物等の研究に関する細胞生物科学研連での検討状況および第4部和田部長を通して学術会議全体へ働きかける事などが報告・説明され、生物科学研連としてもこれを支持して行く事となった。
- 5) 森脇和郎委員より、科学技術基本法第12条にうたわれている「生物科学研究支援機能の充実」実現に向けての問題点などが説明され、若干の意見交換をした。
- 6) 生化学研連、生体機能応用技術研連、遺伝子操作専門委員会など4部以外に所属する関連研連等との連携の可能性について委員長より説明があり、その必要性などにつき意見交換をした。
- 7) その他に、ゴードン会議の日本における開催、The International Molecular Biology Network for Asia and the Pacific Rimの結成等につき委員長から紹介があった。

2. 2月12日に連合部会および部会が開催された。発生生物学会に関係したこととして、クローン動物について、上記の生物科学研連4)と同じ内容の検討が行なわれ、4部から学術会議全体での検討を提案する事になった。また、大学関連研究施設経費・特別事業経費等の削減について、物理学研連の長岡委員長名で第4部会員に配布された資料をもとに検討し、事の重大さに鑑み、緊急に学術会議全体で検討するよう提案する事になった。

3. 2月23日に第2回動物科学研連が開催された。各種報告の後に議事に入り以下の決定・検討がなされた。
 - 1) シンポジウム：10月7日に早稲田大学人間科学部で開催される動物学会関東支部シンポジウム「地球生物の共存をめざして」を動物学会、早稲田大学人間科学部とともに共催することが承認された。(竹井委員担当)
 - 2) 理学総合連絡会議：第4部(理学)と第4部関連研究連絡委員会・専門委員会とが密接な協力関係を持つことによって学術会議の機能の有効化を図ることを主旨とした「理学総合連絡会議」に、本研連としても積極的に参画することにした。第1回連絡会議(3月24日)には、委員長と漆原幹事が出席することとなった。
 - 3) クローン動物：細胞生物学研連のクローン動物についての意見表明(案)に関して、配布資料に基づき意見交換し、「基本的には賛成だが、誤解を招くことの無いようにもっと練った声明を出すべきである(岡田委員)」との多数意見を受け、生命科学研連でもう少し検討したうえで、練り上げた案をファックス、電子メールなどで回覧し議論することとなった。
4. 3月24日に第1回理学総合連絡会議(理総連)が開催され、動物科学研連からは漆原幹事が出席した。この連絡会議は、第4部会(理学)と第4部会に関連する研究連絡委員会／専門委員会(研／専委；副会長担当を含む)、ひいては理学関連諸学会、全国諸大学の理学部などの理学ヒューマンリソースとが密接な協力関係を持つことによって、学術会議が本来持っているボトムアップ機能を格段に有効に発揮しようという和田第4部長の提案を発端として設置されたものである。
5. 4月21日～24日に第128回総会(22～24日)・連合部会および部会(21日)等が開催された。総会では、会長による経過報告に始まり各種委員会、部会等の諸報告の後に、提案事項の審議採決が行なわれ、運営審議会附置インターアカデミーパネル委員会および同日本学術会議50周年記念行事実行委員会の設置が認められた。また、第4部会提案の「平成10年度大学等基礎研究施設・設備経費等削減について(要望)」は、学術会議としても重大な問題として取り組む事となったが、その取り扱いは会長に一任した。要望の概略は以下の通り。

「平成10年度大学等基礎研究関連機関予算において、施設・設備経費などの共同利用研究の基盤的経費について、最大15%にも及ぶ大幅かつ突然の削減がなされた。

以下に、この基礎研究に対する経費削減が、科学技術基本法の意図に逆行するもの

であり、かつ、先進科学技術国家としての我が国の国際的評価の著しい低下につながるものであることを関係資料を付して説明・警告し、早急に強力かつ具体的な対策を講ぜられんこと強く要望する。

状況説明・報告

1. 基礎研究のみならず応用・開発研究、さらに産業に及ぶ悪影響（内容略）
2. 我が国の国際信用に及ぼす悪影響（内容略）
3. 削減が及ぼす深刻な影響についての基礎関連研究委員会よりの報告（内容略）」

（本報告は、星会員のメモに基づき、事務局で作成した）

平成10年度学会法人等連絡協議会の報告

上記協議会が平成10年6月30日に開催され、発生物学会からは八杉幹事長が出席した。この会は、文部省学術国際局学術情報課の主催で開催されたもので、およそ250の学会が出席した。内容の概略は以下の通りである。

まず雨宮学術国際局長から、本会の開催主旨、行財政改革と学会の関係、文部省、科学技術庁の教育科学技術省への改編、総合科学技術会議の創設（内閣府内）、補正予算と学術雑誌オンライン化の関係などについて総論的な挨拶があった。

ついで、太田学術情報課長から、先年策定された「科学技術基本計画」は我が国の科学技術の推進に追い風となっているが、それにもかかわらず昨今の財政の状況から、いろいろな点で見直しを迫られていることが述べられた。教育科学技術省や総合科学技術会議、学術会議、経済産業省との関係などについてもかなり具体的に述べられた（ただし多くの点はまだ未定）。財政改革では、キャップ制度がとられ、とくに国立大学の経常的予算は15%減を余儀なくされていることが報告された（本サーキュラーの学術会議の報告も参照）。

学術情報課の小林専門委員からは、公益法人をめぐる最近の動向について説明があった。さらに、柴崎課長補佐から、本会の主要テーマである研究成果公開促進費について説明があった。この促進費（助成金）は、平成10年度には249件の学術雑誌に対して交付されているが、財政当局からはその効果をめぐって厳しい見直しを求められているとのことであ

り、長期にわたっていても成果が上がらないものや、少額のもの厳しく査定されるだろうとのことであった。各学会とも、自立の努力が望まれるということである。また同課長補佐からは、雑誌のオンライン化を支援する体制が出来つつあることが述べられた。本年度中に編集・出版システムの開発・構築事業の骨格ができるとのことである。

このような文部省からの説明に続いて、学術情報センター、学術振興会からそれぞれその事業内容と学会に対する直接・間接の支援項目について説明があり、若干の質疑の後に会が終了した。

このような会合がこの時点で開催されたことは、我が国の諸般の現状に鑑みて、各学会ともそれぞれに効率の良い運営と自立のための努力をして欲しいという文部省の要請の表れであろうかと思った次第である。特に学会誌の発行については、学会として一層の検討、改善を図らなければならないであろう。

第14回国際発生生物学会開催について

竹 市 雅 俊

国際発生生物学会（International Society of Developmental Biologists (ISDB)、現会長Walter Gehring、事務局ユトレヒト）は、国際会議を4年に一度開催しています。前回のアメリカ・スノーボードにおける大会において、次回（第14回）はアジアで開催することが決まり、これを受けて日本発生生物学会の運営委員会で協議した結果、本学会が主催団体として開催を引受ることになりました（熊本大会総会で報告済み）。当面決まったスケジュールは以下の通りです。

開催期日：2001年、7月8日～12日

開催場所：京都国際会議場

また、この年には、日本発生生物学会の大会は、この国際会議と合同で行うこととし、国内大会は単独では開かないことも決まりました。

前回のアメリカ大会は、アカデミックな意味で非常に評判のよいものでした。それを継

承しようというのが、私達の一致した意見です。国際会議を日本で開催する意義について、海外の人々、とくにこの分野の進歩に重要な役割を担っている人々と、直接、接触できるという大きなメリットがあるのは当然ですが、同時に、日本の研究成果を国際的に認知させることのできるチャンスでもあります。日本の地理的・言語的特殊性ゆえに、私達が創り出した豊かな研究成果に関し、海外における認知、評価などについて様々な問題があると思われますが、議論の舞台を日本に持ち込むことにより、そのような問題の解消にも役立つはずです。日本発生物学会の特徴は、若いメンバーのエネルギーが非常に高いことです。私達の方針として、これを、国際大会のプログラムの作成やその他の運営にも、最大限活かそうと考えています。大会をできるだけ有意義なものにするために、よいアイデアを思いつかれましたら、組織委員会のメンバーにどしどしお寄せください。なお、組織委員会のコアとなるメンバー（幹事）は、以下の通りです。これらの人々を中心にそれぞれの委員会を構成して、準備を進めていきます。ご協力よろしくお願いいたします。

大会組織委員長	竹市雅俊
大会組織副委員長	岡田益吉、長濱嘉孝、浅島 誠
総務委員会	佐藤矩行
プログラム委員会	近藤寿人
財務委員会	浅島 誠
募金委員会	岡田益吉
広報渉外委員会	長濱嘉孝

日本発生生物学会会則

会則は本則・付則・選挙細則よりなる。

本 則

第1条 本会は日本発生生物学会（Japanese Society of Developmental Biologists：略称はJSDB）という。

第2条 本会は発生生物学の進歩と普及をはかることを目的とする。

第3条 本会はその目的を達成するために次の事業を行なう。

1. 欧文誌の刊行
2. 大会の開催
3. その他本会の目的達成に必要な事業

第4条 本会の会員は正会員、学生会員、賛助会員の3通りとする。

1. 正会員および学生会員は本会の趣旨に賛同し、所定の手続を経て、通常会費を納めたもので、欧文誌などの刊行物の配布を受ける。また、大会での研究発表の申し込みをすることができ、総会の議事に参加することができる。
2. 賛助会員は本会の趣旨に賛同し、本会の承認をうけ、所定の賛助会費を納めた個人または法人で、欧文誌などの刊行物の配布をうける。

第5条 本会には次の役員をおく。

会長1名・運営委員若干名・幹事若干名（うち幹事長1名）・欧文誌編集委員若干名（うち編集主幹1名）・会計監査2名

1. 会長は本会を代表し、会務を統べる。任期は2年とし、連続3期をつとめることはできない。
2. 会長および運営委員は運営委員会を構成し、本会の要務を審議し会の運営にあたる。

運営委員会は会長・3名以上の運営委員・30名以上の正会員あるいは学生会員のいずれかの要請により開かれる。

運営委員の任期は2年とし連続3期をつとめることはできない。会長が不測の事故などによりその任務を遂行できなくなった時は、運営委員会の議を経て会長代行をおくことができる。

3. 幹事長および幹事は会長を助けて庶務・会計などの日常の会務を処理する。
4. 会計監査は前年度の決算を監査する。
5. 欧文誌の編集主幹および編集委員は編集委員会を構成し、編集に関しての一切の責任を負う。編集主幹および編集委員の任期は3年とする。

- 第6条 本会の会計年度は1月1日に始まり同年の12月31日に終る。
- 第7条 本会は原則として年1回定時総会を開き、会務を協議し、議決する。なお会長が必要と認めたときには、臨時総会を開くことができる。
- 第8条 本会は定時総会のとき大会を開き研究発表などを行う。大会には大会委員長1名と大会委員若干名をおく。大会委員長は会長が委嘱し、大会委員は大会委員長が委嘱する。
- 大会の運営は大会委員長の責任において行なう。
- 第9条 正会員および学生会員が会費を1年以上滞納したときには除名することがある。
- 第10条 本会は地方支部をおくことができる。
- 第11条 本会の会則の変更は総会において協議し、出席会員の3分の2以上の同意を得なければならない。

付 則

- 第1条 本会の事務所は運営委員会の議をへて会長が委嘱する。
- 第2条 会費は次の通りとする。
1. 正会員は年額10,000円を年度始めに納入する。
 2. 学生会員は年額8,000円を年度始めに納入する。
 3. 賛助会員の賛助費は年額30,000円以上とする。
- 第3条 会長および運営委員の選出方法は次の通り定める。
1. 会長および運営委員（14名）は、正会員および学生会員の投票により選出される。その際、会員はそれぞれ若干名の候補者を推薦することができる。
 2. 選挙の管理は運営委員会が委嘱した選挙管理委員（3名）が行なう。
- 第4条 幹事長および幹事は会長が委嘱し、運営委員会の承認をうける。
- 第5条 欧文誌の編集は、次の通り行う。
1. 編集主幹は、運営委員会が委嘱する。
 2. 編集委員は、3名を運営委員会が選び、さらに、発生生物学の動向を考慮に入れて10名内外を編集主幹が指名する。このうち、3名内外を編集副主幹（associate editor）に編集主幹が指名する。
 3. 以上のほか、専門領域等を考慮して、若干名のadvisory boardを編集主幹が指名する。
- 第6条 会計監査は運営委員会の議を経て会長が委嘱する。
- 第7条 本則第3条3項に定める事業を行なうために、委員会を設けることができる。委員は会長が委嘱し、うち1名を委員長とする。

第8条 運営委員会は少なくとも10年毎に、広く会員の意見を聞き、本会のあり方に関して根本的な再検討を加えねばならない。

第9条 本会則は昭和47年1月1日より施行する。

申し合わせ事項

1. 毎年1月1日から総会までの会の運営は会長の責任による暫定予算によって執行し、その会計年度の予算とともに総会で承認を受ける。
2. 日本発生生物学会発足10年目の反省に基づき、会長は、上記の選出方法によって選出された委員以外に3名以内の委員を別に委嘱することができる。
3. 科学研究費補助金の分科・基礎生物科学、細目・発生生物学における審査委員候補者の選定を運営委員会に委ねる。
4. 国際発生生物学会のboard memberは運営委員会において選出する。

付 記

1. 本会則は、1971年8月25日第4回総会にて承認。
2. 付則の第1条、第2条、第3条は昭和49年6月22日、第7回総会に於て変更した。
3. 昭和51年5月28日、第9回総会に於いて前文を追加、本則第5条、第11条、付則第3条を変更した。
4. 昭和57年5月28日、第15回総会に於いて付則第2条、第5条を変更した。
5. 昭和62年5月29日、第20回総会に於て、本則第4条、第9条、付則第2条、第3条、会長選挙施行細則第3条、運営委員選挙細則第3条の学生会員創設および会費の改訂に伴う変更が承認された。この改訂は昭和63年1月1日より施行される。
6. 1991年5月24日、第24回総会に於て付則第2条を変更した。
7. 1992年5月29日、第25回総会に於て付則第5条を変更した。
8. 1993年5月27日、第26回総会に於て付則第5条を変更した。

会長選挙施行細則

第1条 本細則は会則に定められた会長の選出に関する手続である。

第2条 選挙の施行に関する一切の管理は選挙管理委員（委員は委員会を構成し、1名を委員長とする）の責任の下で行なう。

第3条 選挙は正会員および学生会員の単記無記名投票によって行なう。

1. 投票用紙は選挙管理委員会所定のものに限り、所定の期日までに到着するよう郵送されなければならない。

2. 投票用紙には被投票者の姓名を明記すること。ただし、同姓同名の被選挙人が2名もしくはそれ以上ある場合は、住所・所属機関名などを付記すること。
- 第4条 第3条に従って記載された投票を有効とする。ただし、2人もしくはそれ以上記名されたり、なに人を指すか判断不可能な記名があった場合は無効とする。その他の有効・無効についての決定は選挙管理委員の協議によって行なう。
- 第5条 第1次選挙において有効投票の過半数を得たものを当選者とする。過半数を得たものがないばあいは得票数の多いもの3名を第2次選挙の候補者とする。ただし、上位3番目までに同数得票者があり、その総数あるいはそれより上位の得票者を含めた数が4あるいは、それを越える場合には、これら同数得票者を第2次選挙の被選挙人とし、第3条に従って単記無記名投票とする。
- 第6条 第2次選挙において最多票を得たものを当選とする。ただし、最多得票数が2名もしくはそれ以上ある場合は管理委員の抽選によって当選者を決定する。
- 第7条 選挙の結果はただちに会長に報告され、当選者への通知は選挙管理委員名で行なわれる。

運営委員選挙施行細則

- 第1条 本細則は、会則に定められた運営委員の選出に関する手続である。
- 第2条 (会長の場合と同じ——省略)
- 第3条 選挙は正会員および学生会員の14名連記無記名投票によって行なう。
1. 投票用紙は選挙管理委員会が定めたものに限り所定の期日まで到着するよう郵送されなければならない。
2. 投票は14名連記とし、被投票者の姓名を明記すること、ただし、同姓同名の被選挙人が2人もしくはそれ以上ある場合は、住所・所属機関などを付記すること。
- 第4条 第3条に従って記載された投票を有効とする。その他の有効・無効についての決定は選挙管理委員の協議によって行なう。
- 第5条 当選者は得票数の多いもの14名とする。ただし、得票数で上位14番目までに同数得票者があり、その総数あるいはそれより上位の得票者を含めた数が15あるいはそれを越える場合は下位の同数得票数について選挙管理委員の抽選により当選者を決定する。
- 第6条 会長が運営委員より選ばれた場合は次点者をくりあげる。
- 第7条 (会長の場合と同じ——省略)

お茶の水女子大学理学部生物学科 教官公募

公 募 人 員：教授又は助教授 1名

研究・教育分野：植物科学の学問領域において分子生物学的手法を主とした研究・教育を推進できる方。生物学科の現教官とその研究分野については下記ホームページをご参照下さい。着任後は、理学部生物学科に所属し、学部および大学院（博士課程前・後期）における実習および講義、学部4年生の卒業研究、大学院生の研究指導を担当していただきます。

資 格：博士の学位を有し、30代後半から50代前半までの方が望まれています。

応 募 書 類：(1)履歴書、(2)業績リスト、(3)主要論文の別刷りまたはコピー（業績リストの該当番号に○印を付けて下さい）、(4)現在までの研究の概要と将来の研究計画、(5)お茶の水女子大学着任後の教育に関する抱負、(6)推薦書2通

応募締め切り：平成10年12月10日（木）必着

着 任 時 期：平成11年4月1日

書類送付先・問合せ先：

〒112-8610 東京都文京区大塚2-1-1 お茶の水女子大学理学部生物学科
主任 根本心一 (Tel/Fax: 03-5978-5369, e-mail: snemo@cc.ocha.ac.jp)、又は人事選考委員長 室伏きみ子 (Tel/Fax: 03-5978-5362, e-mail: murofush@cc.ocha.ac.jp)。

そ の 他

- *封筒には「生物学科教官応募書類在中」と朱書し、書留で郵送願います。
- *選考の過程で、当学科構成員との面談やセミナーをお願いする場合があります。
- *ホームページ： (<http://www.ocha.ac.jp/>)

(財)ブレインサイエンス振興財団、第13回塚原仲晃記念賞受賞者・研究助成候補者及び第12回国際交流助成候補者の推薦を公募

ブレインサイエンス振興財団では、平成10年度の褒賞、助成事業として下記の事業を行う計画で、候補者の推薦を公募している。

I. 褒賞、助成事業

1. 塚原仲晃記念賞：生命科学の分野において優れた独創的研究を行っている45歳以下の新進気鋭の研究者に賞牌及び賞金100万円（原則として1件）
 2. 研究助成：ブレインサイエンスの分野において国際的評価に値する研究の助成。研究分野は、脳神経に関する実験的研究のみならず理論、モデリング研究をも含む。
助成件数 8件、1件 80万円
 3. 派遣助成：ブレインサイエンスの研究の促進を図るため、国際学会、シンポジウム等への参加、あるいは短期間の共同研究のための研究者の海外派遣の助成。往復渡航運賃を30万円を限度として若干件助成。
(助成総額120万円)
 4. 招聘助成：ブレインサイエンス研究分野において、独創的テーマに意欲的に取り組んでいる外国人研究者の短期間（3ヶ月以内）の招聘の助成。往復渡航運賃または滞在費を30万円を限度として若干件助成。
(助成総額 80万円)
- II. 推薦方法：関連学会代表責任者または研究者の所属機関長及び当財団の理事、評議員の推薦による。但し、所定の用紙に必要事項を記入すること。
- III. 推薦締切日：1及び2については平成10年11月27日（金）
3及び4については平成11年1月18日（月）
- IV. 選考：選考委員会での選考を経て、平成10年3月中に評議員会、理事会で決定。

推薦要領及び推薦書式を御希望の方は、80円切手同封のうえ財団宛文書でお申込下さい。

(財)ブレインサイエンス振興財団

〒104 東京都中央区八重洲2-6-20

ホンダ八重洲ビル内

電話 (03) 3273-2565



第39回（平成10年度）

平成 10 年 6 月

東レ科学技術賞候補者推薦要領

1. 候補者の対象……………貴学協会に関する分野で、下記に該当するもの
 - (1) 学術上の業績が顕著なもの
 - (2) 学術上重要な発見をしたもの
 - (3) 重要な発明をして、その効果が大きいもの
 - (4) 技術上重要な問題を解決して、技術の進歩に大きく貢献したもの
2. 科学技術賞……………1件につき、賞状、金メダルおよび賞金 500万円（2件前後の予定）
3. 推薦者……………学協会の代表者および推薦委員
4. 候補者推薦件数……………1学協会から2件以内（平成9年度に推薦された候補者（注b.）は外数とします）および1推薦委員から1件以内
5. 推薦手続……………所定の推薦書用紙に必要事項を記載し、当会あて1部ご送付願います。
6. 推薦締切期日……………**平成10年10月9日（金）必着**
7. 選考方法……………下記委員からなる選考委員会において選考し、評議員会において受賞者を決定します。

選考委員	（委員長）	宇井理生	猪瀬 博	有馬朗人	廣田榮治
		八木克道	本庶 佑	矢川元基	岸 輝雄
				星 元紀	
8. 科学技術賞の贈呈……………平成11年3月の予定

- （注）a. 候補者は、必ずしも貴会会員であることを要しません。また貴会の関連領域にある候補者についてもご配慮願います。
- b. 推薦を受けた候補者は、その年度および次の年度にわたって選考の対象としております。したがって平成9年度に推薦された候補者については、平成10年度候補者として再度推薦の必要はありません。ただし平成9年度の推薦以後において、追加すべき顕著な業績又は発表や受賞があった場合は、平成9年度推薦書（コピー）に加筆して当会あてご送付願います。
- c. 受賞者は、原則として1件1人としします。特に複数であることを必要とするときはそれらの研究者の寄与が同等であることを示して下さい。ただし、この場合でも1件として取り扱います。
- d. この科学技術賞は、所得税法（第9条第1項第13号ニ）の規定により非課税となっています。

（推薦書提出先・連絡先）

財団法人 東レ科学振興会

〒279-8555 千葉県浦安市美浜一丁目8番1号（東レビル）

TEL：(047) 350-6103

FAX：(047) 350-6082

東レ科学技術研究助成候補者推薦要領

1. 候補者の対象……………貴学協会に関する分野で国内の研究機関において基礎的な研究に従事し、
今後の研究の成果が科学技術の進歩、発展に貢献するところが大きいと考
えられる独創的、萌芽的研究を活発に行っている若手研究者
2. 研究助成金……………総額1億3千万円。1件3千万円程度まで10件程度とします。
3. 推薦者……………学協会の代表者および推薦委員
4. 候補者推薦件数……………1学協会から2件以内および1推薦委員から1件以内
5. 推薦手続……………所定の推薦書用紙に必要事項を記載し、当会あて1部ご送付願います。
6. 推薦締切期日……………平成10年10月9日(金) 必着
7. 選考方法……………下記委員からなる選考委員会において、提出された書類により一次選考を
行い、更に面接による二次選考を経て、評議員会において決定します。
なお、二次選考対象の代表研究者の方は、平成10年12月下旬に面接をさせ
ていただきます。

選考委員 (委員長) 宇井理生 猪瀬 博 有馬朗人 廣田榮治
八木克道 本庶 佑 矢川元基 岸 輝雄 星 元紀

8. 研究助成金の贈呈……………平成11年3月の予定

- (注) a. 候補者は、必ずしも貴会会員であることを要しません。また貴会の関連領域にある候補者についてのご配慮願います。
- b. この研究助成金は、研究目的を達成するために有効に使用されるものであれば、どのように使われるものを申請されても結構です。ただし、助成金受領決定後、その用途を変更される場合は、事前に当会の承諾を得ていただきます。
助成金は使用期間の制限がありません。
- c. 助成金の受領者は、研究終了時まで毎年「助成研究年次報告書」を、また研究終了時に、「助成研究終了報告書」を提出していただきます。
- d. この助成金は、所得税法(第9条第1項第13号ニ)の規定により非課税となっています。

(推薦書提出先・連絡先)

財団法人 東レ科学振興会

〒279-8555 千葉県浦安市美浜一丁目8番1号(東レビル)

TEL : (047) 350-6103

FAX : (047) 350-6082

1999年度「助成科学者に明るい未来をの会・猿橋賞」の受賞候補者 及び研究助成候補者の推薦依頼について

「女性科学者に明るい未来をの会」（1980年創立）は、自然科学の分野で、顕著な研究業績を収めた女性科学者に、毎年、賞（猿橋賞）を贈呈してまいりました。

1990年度からは、さらに、海外のシンポジウム等に出席し、論文を発表する若手の女性研究者にたいし、研究助成することにいたしました。

賞金と助成金は、本会を母体として新設された、公益信託（1990年3月13日文部省認可）「女性自然科学者研究支援基金」（受託者 東洋信託銀行株式会社）から支出されます。

つきましては、下記の要領により受賞候補者と研究助成候補者の推薦をお願いいたします。

記

猿橋賞

1. 本賞は自然科学の分野で、顕著な研究業績を収めた女性科学者（ただし、下記の推薦締切日で50才未満）に贈呈します。
2. 本賞は賞状とし、副賞として賞金（30万円）をそえます。
3. 本賞の贈呈は1年1件（1名）です。
4. 所定の用紙に受賞候補者の推薦対象となる研究題目、推薦理由（400字程度）、略歴、主な業績リスト、主な論文別刷10編程度、及び推薦者氏名・肩書きを、本会事務所までお送り下さい。
5. 締切は1998年11月30日（必着）。
6. 第19回の賞贈呈式は、1999年5月、東京において行なう予定です。

なお、最近3年間の猿橋賞受賞者は次の通りです。

猿橋賞受賞者

第16回（1996）理化学研究所主任研究員 川合 真紀 博士

「固体表面における化学反応の基礎研究」

第17回（1997）名古屋大学生物分子応答研究センター 助教授 高倍 鉄子 博士

「植物耐塩性の分子機構に関する研究」

第18回（1998）千葉大学大学院自然科学研究科 教授 西川 恵子 博士

「超臨界流体の研究」

研究助成

1. 海外のシンポジウム等に出席し、論文を発表する女性研究者に対し、研究助成をい

たします。

2. 助成金は1件10万円とし、年に数件とします。
3. 所定の用紙に推薦対象者（各締切日において 満40才未満）の略歴、研究業績、国際会議名（主催団体、開催場所、年月日）、発表論文題目、推薦理由等、及び推薦者氏名・肩書きを記入して、本会事務局までお送りください。
4. 締切は1998年11月末日と、1999年4月末日の2回。

女性科学者に明るい未来をの会

〒166-0002 東京都杉並区高円寺北4-29-2-217

電話03-3330-2455（FAX兼用）

公益信託・團生物科学国際基金 平成11年度助成先公募について

1. 助成の対象

生物科学（発生生物学、細胞生物学、分子生物学等）の研究にたずさわっている若手研究者を対象とし、申請時に原則として37歳以下とし、国籍は問わない。

また、諸外国からの若手研究者の募集、招聘などを含む。

2. 研究助成金

平成11年4月～平成12年3月出発のものを対象とする。

総額約400万円。

- ①長期（3カ月程度）の国際共同研究のための旅費と滞在費（1名当り90万円以下）。
- ②短期（1カ月程度）の国際共同研究のための旅費と滞在費（1名当り50万円以下）。
- ③国際研究集会参加のための旅費と滞在費（1名当り50万円以下）。

3. 応募方法

所定の用紙ならびに募集要項の詳細は当公益信託事務局にハガキで請求のこと。

（注：長期、短期、国際研究集会の区別を必ず明記のこと）。

4. 申込締切日

平成10年10月31日（必着）。

5. 選考の方法

当公益信託運営委員会において選考する。

6. 採否の通知

平成10年12月に採否を通知する。

7. 事務局

〒103-8266 東京都中央区日本橋3-1-8

日本信託銀行株式会社

本店営業第三部営業第一グループ

公益信託 團生物科学国際基金

担当：遠藤雅範

T E L (03) 3245-8140

F A X (03) 3271-2843

木原記念財団学術賞推薦等要項

〔推薦の対象〕

1. 推薦の対象は、最近において生命科学の分野で優れた独創的研究を行なっている国内の研究者で、原則として50才以下の者とします。

ただし、推薦の研究課題で他の著名な賞を受けていないこととします。

〔推薦の依頼先〕

2. 推薦は生命科学に関する学会及び木原記念財団の役員に依頼しています。

推薦依頼学会：別添

〔推薦の方法〕

3. 推薦者は学会の代表者及び木原記念財団の役員とし、1推薦者からの推薦は1件とします。

(2) 推薦は所定の推薦書（別添）に必要事項を記入し、当財団あてに1部送付願います。

(3) 推薦の締切日は平成10年9月末日とします。

〔選考方法及び結果〕

4. 受賞者は、当財団の選考委員会で候補者を選考し、理事会にて決定します。

(2) 選考結果は推薦者及び受賞決定者に通知します。

(3) 選考結果は公表します。

〔木原記念財団学術賞の内容〕

5. 本賞は毎年原則として1件に贈呈します。

(2) 本賞は賞状、記念牌及び賞金200万円を贈呈します。

＜参考＞これまでの受賞者は次の方々です。

第1回 野村 大成 大阪大学教授

研究課題：発癌および癌奇形性変異の後代への伝達

第2回 浅島 誠 東京大学教授

研究課題：両生類の胚誘導と細胞分化に関する研究

第3回 五條堀 孝 国立遺伝学研究所教授

研究課題：病原性ウイルスの起源と進化に関する研究

第4回 岡田 典弘 東京工業大学教授

研究課題：ゲノムの多様性の獲得機構とその進化的意義に関する研究

第5回 廣近 洋彦 農業生物資源研究所分子遺伝部ゲノム動態研究室長

研究課題：植物トランスポゾンの分子遺伝学的研究

第6回 西田 育巧 名古屋大学大学院理学研究科教授

研究課題：ショウジョウバエを用いたがん遺伝子の研究

〔推薦書提出先、連絡先〕

財団法人木原記念横浜生命科学振興財団

〒244-0813 横浜市戸塚区舞岡町641-12

T E L 045-825-3487

F A X 045-825-3307

沖縄研究奨励賞規則

(目 的)

第1条 沖縄の地域振興及び学術振興に貢献する人材を発掘し、育成するため、財団法人沖縄協会沖縄研究奨励賞（以下「奨励賞」という。）を設ける。

(対 象)

第2条 奨励賞は、沖縄を対象とした将来性豊かな優れた研究（自然科学、人文科学又は社会科学）を行っている50歳以下（7月15日現在）の新進研究者（又はグループ）3名に贈る。

(表 彰)

第3条 受賞者には、奨励賞として本賞並びに副賞として研究助成金50万円を贈り表彰する。

(選考委員)

第4条 財団法人沖縄協会会長（以下「会長」という。）は、学識経験者の中から奨励賞選考委員（以下「委員」という。）若干名を委嘱する。

2 委員は、選考委員会（以下「委員会」という。）を構成し、当該年度の受賞候補者を選考する。

(選考委員会)

第5条 委員会は、年1回以上会長が召集する。

〔第2項～第7項 省略〕

(候補者)

第6条 奨励賞に応募する資格を有する者は、第2条に定める対象に該当し、且つ学会、研究機関若しくは大学又は実績のある研究者から推薦を受けた新進研究者又はグループ（以下「候補者」という。）とする。

2 候補者がグループの場合は、1グループを1名とみなす。このとき代表者1名を決めなければならない。

3 前項のグループ構成員は、全員が50歳以下（7月15日現在）でなければならない。

4 候補者の出身地及び国籍は問わないものとする。

(日 程)

第8条 奨励賞の推薦は、原則として毎年7月15日に応募を開始し、9月30日（当日消印を有効とする。）に締め切り、12月に当該年度の受賞者を決定し、翌年1月に贈呈式並びに受賞者記念講演を行うものとする。

〔お問い合わせ先〕

〒100-0013 東京都千代田区霞ヶ関 3-6-15 グローリアビル 7F

(財) 沖縄協会「沖縄研究奨励賞」担当

石坂次郎、大嶺隆

T E L : 03-3580-0641 F A X 03-3597-5854

ホームページ <http://village.infoweb.ne.jp/~fvgm0090/index.htm>

E-mail fvgm0090@mb.infoweb.ne.jp

日本学術協力財団主催学術シンポジウム企画募集要領

平成10年6月1日 日本学術協力財団

1. 事業の趣旨

本事業は、日本学術協力財団（以下「財団」という。）が、学術研究団体等（以下「学・協会」という。）と共同して学術シンポジウムを開催することにより、学・協会が開催を希望するシンポジウムを支援し、併せて国民一般に対して学術研究の理解の促進と、我が国の学術研究の発展に資することを目的とするものです。

2. 学術シンポジウムの内容

開催する学術シンポジウムは、国民一般に関心が高いと思われる分野の研究動向・研究内容について、以下のいずれかに該当するものとします。

- (1) 社会問題となっているもの（例えば臓器移植や環境問題など）
- (2) 最先端分野に関するもの（例えば遺伝子工学の現状や宇宙工学の進展状況など）
- (3) 基礎的・啓発的なもの

3. 企画の募集

(1) 応募資格

原則として、学術シンポジウムの実施に際して、日本学術会議の研究連絡委員会（以下「研連」という。）の協力が得られる学・協会とします。また、複数の学・協会により応募される場合には、代表する学・協会を決めた上、応募して下さい。

(2) 申請方法

学術シンポジウムの開催を希望する場合には、別添の「学術シンポジウム開催企画書」を正本・副本（正本のコピーでも可）併せて2部作成の上、平成10年6月30日までに当財団あて送付して下さい。

4. 事業の実施形態

(1) 主催者等

学術シンポジウムの開催に当たっては、財団及び当該学術シンポジウムの開催を希望した学・協会とによる共同主催とします。

(2) 開催期間

それぞれの学術シンポジウムについて、平成10年9月1日から平成10年2月10日までの間の1日とします。

5. 開催する学術シンポジウムの選考

学術研究者等から成る「学術シンポジウム開催委員会」において、上記3.(2)により、応募された企画の中から選考します。

平成11年度 日本学術振興会ナポリ臨海実験所派遣研究者募集要項

平成10年5月 日本学術振興会

1. 趣旨

日本学術振興会は、国際学術交流事業の一環として、昭和40年以来イタリアのナポリ臨海実験所（Stazione Zoologica di Napoli - 別紙資料参照）に研究者を派遣している。なお、この事業は昭和59年度から、本会とイタリア学術研究会議（National Research Council of Italy-CNR）との間の協定にもとづく研究者交流事業の下で実施している。

2. 対象分野

海洋生物学の分野

3. 応募資格

(1) 短期派遣研究者

我が国の大学等学術研究機関に所属する常勤の研究者であること。

(2) 長期派遣研究者

我が国の大学等学術研究機関に所属する常勤の研究者、又は研究生等としてこれらの機関で研究に従事している博士の学位を有する者であること。

長期派遣研究者においては、若手（平成11年5月1日現在、年齢が40歳未満の者）であることが望ましい。

4. 採用予定数

(1) 短期派遣研究者：1名

(2) 長期派遣研究者：1名

5. 派遣期間及び派遣時期

(1) 派遣期間は短期15日以上30日以内、長期4か月以上6か月以内とする。

(2) 平成11年4月1日から平成12年3月31日までに出発する研究者を対象とする。

6. 支給経費（予定）

(1) 本会負担：往復渡航費

(2) CNR負担：滞在費（平成10年5月現在）－ 短期 15万リラ／日

長期 250万リラ／月

国内旅費（イタリア国内）－実費支給（ただし、短期派遣は4か所、
長期派遣は2か所まで）

申請受付期間

平成10年8月17日（月）～9月11日（金）

申請書類の提出先及び連絡先

〒102-0083 東京都千代田区麹町5-3-1（ヤマトビル）

日本学術振興会 研究協力課

ナポリ臨海実験所派遣研究者担当係

電話（03）3263-1721（代表）

「朝日賞」候補者推薦のお願い

拝啓、時下ますますご清栄のこととおよろこび申し上げます。

朝日新聞文化財団の諸事業に日頃から格別のご指導、ご協力をいただき厚くお礼申し上げます。

さて、このたびは1998年度「朝日賞」の候補者をご推薦いただきたく、推薦票を添えてお願い申し上げます。

朝日新聞社は文化活動支援を公的な立場からおこなうため、1992年に「朝日新聞文化財団」を設立し、朝日賞の授賞事業は当文化財団が継承しました。

この賞は、1929年（昭和4）年に朝日新聞社が、創刊50周年を記念して創立したもので、わが国のさまざまな分野において、傑出した業績をあげ、文化、社会の発展、向上に貢献をされた個人または団体にお贈りしてまいりました。

今年も、広く各界の皆様には授賞候補者の推薦をお願いする次第です。ご推薦を頂戴したあと、さらに幅広くご意見を伺ったうえ、朝日賞選考委員会で慎重に審議し、受賞者を決定いたします。

趣旨、意義をおくみ取りいただき、候補者のご推薦をいただければ幸いです。皆様の専門外の分野からのご推薦も歓迎いたします。

ご多忙のところ恐縮ですが、推薦票は 9月1日(火) までに同封の封筒でお送りいただきたく、お願い申し上げます。

受賞者は1999年元日の朝日新聞紙上で発表し、1月下旬に贈呈式を行います。ご参考までに、これまでの受賞者一覧を同封いたします。

敬具

1998年6月

財団法人 朝日新聞文化財団

※お問い合わせなどは、下記で承ります。

朝日新聞社文化企画局「朝日賞」係

〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2

電話 直通 03-5540-7453 F A X 03-3541-8999

第48回 科学講演会のご案内

主催：東レ科学振興会 後援：朝日新聞社・日本海洋学会・日本気象学会

「化石燃料等に由来する大気中の炭酸ガス濃度の増加と地球温暖化の因果関係が指摘されて久しい。海は地球表面の2／3を占め、その表面で絶えず大気と炭酸ガスの交換も行っており、気候変動・地球環境制御に深くかかわっている。研究の進展で地球上の炭素がどのように循環しているかは最近かなり明らかになってきた。

一方昨年春頃から観測史上最大規模のエルニーニョ現象が発生し、世界各地に多くの異常気象と災害をもたらしている。熱帯域の大規模な大気海洋相互作用を明らかにして、気候変動に与える影響を予測しようという研究も近年著しい進展を見せてきている。

今回はこれら地球規模の物質循環と気候変動の研究を先導して来られている斯界の権威のお二人の先生をお招きし、科学の最先端の話を分かり易くお話し頂くこととした。

バスコ・ダ・ガマが喜望峰回りのインド航路を発見して今年丁度500年目。“国際海洋年”にふさわしい催しにご期待乞う。」

と き：平成10年9月18日（金） 開演18時00分 終演20時45分

ところ：有楽町朝日ホール（有楽町マリオン11階）

東京都千代田区有楽町2-5-1（JR有楽町駅前）

テーマ：“海洋循環と気候変動”

I. 地球温暖化と海

東京大学海洋研究所・教授

野 崎 義 行

II. エルニーニョの科学

東京大学大学院理学系研究科・教授

山 形 俊 男

その他：★入場無料、予約の必要はありません。

定員638名（当日会場先着順・開場：17時30分）

★ご来聴の方には、後日講演記録を進呈いたします。

【問い合わせ先】 財団法人 東レ科学振興会

〒279 千葉県浦安市美浜1-8-1（東レビル）

T E L 047-350-6103

第15回 (財)加藤記念バイオサイエンス研究振興財団公開シンポジウム 『脂肪細胞—肥満と生活習慣病の解明に向けて』

日 時：平成10年10月17日（土） 12：50～18：00

会 場：経団連ホール（経団連会館14階）

主 催：（財）加藤記念バイオサイエンス研究振興財団

後 援：科学技術庁、厚生省

オーガナイザー：中尾 一和（京都大学医学部教授）・門脇 孝（東京大学医学部講師）

—プログラム—

挨 拶：中村寛之助（財団理事長） 12：50

はじめに：中尾 一和（京都大学医学部） 13：00

講 演：①「脂肪細胞の分化・発生と転写因子」 13：20

河田 照雄（京都大学農学部）

②「生活習慣病と肥満・インスリン抵抗性」 13：50

門脇 孝・戸辺 一之（東京大学医学部）

③「肥満とレプチン抵抗性」 14：20

中尾 一和（京都大学医学部）

④「脂肪細胞に発現する遺伝子群とその生理的意義」 14：50

船橋 徹・松澤 佑次（大阪大学医学部）

———— コーヒーブレイク ———— 15：20～15：40

⑤「エネルギー消費に関与するタンパク

UCPファミリーの役割と肥満のメカニズム」 15：40

Bradford B. Lowell（Harvard大学）

⑥「レプチンによるエネルギー代謝の調節と肥満のメカニズム」 16：35

Jeffrey M. Friedman（Rockefeller大学）

総合討論：中尾 一和（京都大学医学部）・門脇 孝（東京大学医学部） 17：30

参加方法：参加費無料。住所・氏名・所属・電話番号を明記し、下記宛てにハガキまたは
FAXにてお申込み下さい。参加証をお送りします。

但し定員（420名）になり次第締め切ります。

申込締切：10月7日（水）

申 込 先：（財）加藤記念バイオサイエンス研究振興財団

〒194-8533 東京都町田市旭町3-6-6

T E L 0427-25-2576 F A X 0427-22-8614

会 員 異 動

<新入会員>

(氏名)	(所属)	(住所)	((①テーマ、②材料))
鈴木 宏昌	愛知医科大学分子医化学研究所	〒480-1195 愛知県愛知郡長久手町大字岩作字	(1)心臓初期発生 (2)鶏胚
千坂 修	京都大学大学院理学研究科生物物理学教室	〒606-8502 京都市左京区北白川追分町	(1)後脳の分化制御 (2)マウス
小椋 利彦	奈良先端科学技術大学院大学	〒630-0101 生駒市高山町8916-5	(1)肢芽形態形成 (2)ニワトリ肢芽
栗原 靖之	横浜国立大学工学部物質工学科化学生命工学	〒240-0067 横浜市保土ヶ谷区常盤台79-5	(1)生殖細胞分化の遺伝子制御 (2)マウス
飯村 忠浩	東京医科歯科大学大学院歯学研究科発生機構制御学講座	〒113-8549 文京区湯島1-5-45	(1)頭蓋顔面骨の発生生物学 (2)マウス、ラット
小川峰太郎	京都大学大学院医学研究科分子遺伝学	〒606-8507 京都市左京区聖護院川原町53	(1)マウスの中胚葉、血管造血系の発生 (2)マウス
原口 清輝	国立医薬品食品衛生研究所毒性部	〒158-8501 世田谷区上用賀1-18-1	(1)生殖系列の分化、メカニズム (2)mouse embryo
岡野 孝幸	東京工業大学生命理工学部生体機構学科	〒226-8501 横浜市緑区長津田町4259	(1)イトマキヒトデ卵における細胞周期調節因子の活性制御機構 (2)イトマキヒトデ <i>Asterina pectinifera</i>
野村 一也	九州大学理学部生物発生生物学教室	〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1	
見学美根子	京都大学大学院理学研究科生物物理学教室	〒606-8502 京都市左京区北白川追分町	(1)形態形成・神経発生 (2)ニワトリ、マウス
藤森 俊彦	大阪大学細胞生体工学センター	〒565-0871 吹田氏山田丘1-3	(1)初期発生・軸形成 (2)マウス
渋谷 幸二	科研製薬(株)開発研究所安全性研究所	〒426-8646 藤枝市源助301	(1)生殖発生毒性試験 (2)ラット、ウサギ
学今井 薫	京都大学大学院理学研究科生物学専攻動物系分子発生研	〒606-8502 京都市左京区北白川追分町	(2) <i>Ciona savignyi</i> (コウレイボヤ)
学松井 理恵	奈良先端科学技術大学院大学バイオサイエンス科	〒630-0101 生駒市高山町8916-5	(1) <i>Hox</i> の遺伝子発現制御 (2) <i>C. elegans</i>
学服藤 尚恵	国立遺伝学研究所発生遺伝研究部門	〒411-8540 三島市谷田1111	(1)形態形成時(再生時)における極性の形成と維持のメカニズム (2) <i>Hydra magnipapillata</i>
学望月 一史	国立遺伝学研究所発生遺伝研究部門	〒411-8540 三島市谷田1111	(1)ヒドラの生殖幹細胞 (2)ヒドラ
学平野 剛史	東北大学大学院理学研究科分子生体制御学講座前田研究室	〒980-8578 仙台市青葉区荒巻字青葉	(1)細胞性粘菌における急速パターン形成の機構 (2) <i>Dictyostelium discoideum</i>
学方村 美保	京都大学ウイルス研究所	〒606-8507 京都市左京区聖護院川原町53	(1)セキツイ動物の体軸形成機構 (2) <i>Xenopus laevis</i>
学松本 潤	高知大学大学院理学研究科生物学専攻	〒780-8520 高知市曙町2-5-1	(1)細胞の分化 (2)ミサキマメイタボヤ <i>Polyandrocampa misakiensis</i>

学今泉 隆志	熊本大学医学部遺伝発生 研発生遺伝	〒862-0976	熊本市九品寺4-24-1	(1)遺伝子トラップ (2)ES cell, mouse
学鈴木 賢一	広島大学理学部生物科学 科発生生物学講座	〒739-8526	東広島市鏡山1-3-1	(1)ウシガエルの表皮 (2)ウシガエル
学杉山 紀之	東北大学加齢医学研究所 分子発生研究分野	〒980-8575	仙台市青葉区星陵町4-1	(1)精子形成における精原細胞の分化 と細胞死
学小野寺 浩	埼玉大学理学部生体制御 学科	〒338-8570	浦和市下大久保255	(1)発生におけるチロシンキナーゼの 機能 (2)ウニ、ゼブラフィッシュ
学渡利 夏子	京都大学理学部生物物理 学教室	〒606-8502	京都市左京区北白川追分町	(1)神経系の発生 (2)マウス
学中馬新一郎	国立遺伝学研究所発生工 学研究室	〒411-8540	三島市谷田1111	(1)生殖細胞の発生・分化 (2)哺乳類
学綾 友子	奈良先端科学技術大学院 大学バイオサイエンス研 究科分子発生生物学	〒630-0101	生駒市高山町8916-5	(1)水晶体細胞の発生・分化 (2)ニワトリ
学森田美芳子	お茶の水女子大学理学部 生物学科根本研	〒112-8610	文京区大塚2-1-1	(1)イトマキヒトデ融合卵内におけ る2つの中心体の挙動 (2)イトマキヒトデ <i>Asterina pectinifera</i>
学平野 寿雄	東京工業大学生命理工学 部生理学科	〒226-8501	横浜市緑区長津田町4259	(1)マボヤの変態過程を超えての細胞 系譜の追跡 (2)マボヤ <i>Halocynthia roretzi</i>
学伊勢戸 徹	東京工業大学大学院生命 理工学研究科バイオサイ エンス専攻	〒226-8501	横浜市緑区長津田町4259	(1)ホヤ初期発生、卵割パターン (2)マボヤ、カタユウレイボヤ
学吉留 賢	九州大学理学部生物学科 発生生物学講座	〒812-8581	福岡市東区箱崎6-10-1	(1)卵成熟過程 (2) <i>Xenopus laevis</i>
学小川 和也	姫路工業大学理学部生命 科学科細胞制御学Ⅰ講座	〒678-1297	兵庫県赤穂郡上郡町金出地 1475-2	(1)ブラナリアの幹細胞に発現するレ セプター遺伝子の検索 (2)ブラナリア <i>Dugesia japonica</i>
学鯉沼 聡	姫路工業大学理学部生命 科学科細胞制御学Ⅰ講座	〒678-1297	兵庫県赤穂郡上郡町金出地 1475-2	(1)ブラナリアにおけるwinged-helix 遺伝子の解析 (2)ブラナリア <i>Dugesia japonica</i>
学古本 敬明	千葉大学医学部高次機能 制御研究センター免疫	〒260-8670	千葉市中央区亥鼻1-8-1	(1)脊椎骨のバターンニング (2)マウス
学堀川 一樹	京都大学理学部生物物理 学教室竹市研	〒606-8502	京都市左京区北白川追分町	(1)体節の形成および分化 (2)マウス、ニワトリ
学鈴木堅太郎	久留米大学先端癌治療研 究センター細胞発生工学 部門	〒830-0011	久留米市旭町67	(1)脊椎動物における頭部・顔面形成 (2)mouse, chick
学中村 誠司	久留米大学先端癌治療研 究センター細胞発生工学 部門	〒830-0011	久留米市旭町67	(1)脊椎動物における形態形成遺伝子 の機能解析 (2)マウス、チック、ゼブラフィッ シュ
学小田いづみ	東京都立大学大学院理学 研究科生物	〒192-0397	八王子市南大沢1-1	(1)マボヤのホメオボックス遺伝子の 解析 (2)マボヤ <i>Halocynthia roretzi</i>

学林 利憲	名古屋大学大学院理学研究科	〒464-8602	名古屋市千種区不老町	①イモリにおけるレンズ再生機構の研究 ②アカハライモリ、アホロートル
学宇野健一郎	奈良先端科学技術大学院大学	〒630-0101	生駒市高山町8916-5	①高等動物の形態形成 ②ニワトリ、マウス、ヒト
学松本 健	奈良先端科学技術大学院大学バイオサイエンス研究科	〒630-0101	生駒市高山町8916-5	①脊椎動物における形態形成のメカニズムの解明 ②ニワトリ
学山田 耕平	熊本大学理学部生物科学科	〒860-8555	熊本市黒髪2-39-1	①減数分裂開始機構の解明 ②Xenopus laevis
学嘉藤 洋陸	大阪大学医学部バイオメディカル教育研究センター神経機能解剖学	〒565-0871	吹田市山田丘2-2	①発生過程におけるプログラム細胞死の調節機構 ②ショウジョウバエ
学近藤 龍也	熊本大学医学部遺伝発生医学研究施設発生遺伝	〒862-0976	熊本市九品寺4-24-1	①ミエリン形成不全をきたすマウス quaking変異体の原因遺伝子QKIに対する検討 ②mouse quaking, QKI
学斎藤 麻衣	東京農工大学農学部発生生物学辻村研究室	〒183-8509	府中市幸町3-5-8	①ショウジョウバエの変態における神経回路再編成の分子機構 ②ショウジョウバエ
学加納 桂次	東北大学理学部附属臨海実験所	〒039-3501	青森市浅虫字坂本9	①ウニ胚の形態形成における細胞接着の分子機構 ②パフンウニ Hemicentrotus pulcherrimus、タコノマクラ Clypeaster japonicus
学大高 亮彦	東北大学加齢医学研究所分子発生研究分野	〒980-8575	仙台市青葉区星陵町4-1	①上皮-間葉相互作用、腎の発生、幹細胞
学阪上 起世	奈良先端科学技術大学院大学バイオサイエンス研究科	〒630-0101	生駒市高山町8916-5	①水晶体分化を誘導する転写因子L-mafの 프로모ーター解析 ②ニワトリ
学渡辺 俊彦	山形大学理学部生物学科	〒990-8560	山形市小白川町1-4-12	①精子の運動調節機構 ②アカハライモリ
学遠藤 剛	山形大学理学部生物学科	〒990-8560	山形市小白川町1-4-12	①精子形成過程について ②メダカ
学山田 知子	熊本大学大学院医学研究科神経分化学講座	〒862-0976	熊本市九品寺4-24-1	①Eph受容型チロシンキナーゼの解析、網膜-視蓋投射系形成について ②chick
学錦織 晴幸	東京大学大学院理学系研究科生物科学専攻	〒113-0033	文京区本郷7-3-1	①棘皮動物の系統発生 ②ウニ全般
学上村 美佳	高知大学大学院理学研究科生物科学専攻	〒780-8520	高知市曙町2-5-1	①出芽における芽体の形態形成のメカニズム、転写調節 ②ミサキマメイトボヤ Polyandrocarpa misakiensis
横山 和尚	理化学研究所ライフサイエンス筑波研究センター	〒305-0074	つくば市高野台3-1-1	①分化・脱分化誘導 ②細胞、マウス
田中 正史	東海大学総合医学研究所分子医学医療研究センター分子発生科学部門	〒259-1193	伊勢原市望星台	①転写調節 ②酵母

梶原 景正	東海大学総合医学研究所 分子医学医療研究センター分子発生科学部門	〒259-1193	伊勢原市望星台	(1)神経発生科学 (2)近交系マウス、Mus.
田澤 一朗	広島大学理学部附属両生類研究施設発生遺伝学部門	〒739-8526	東広島市鏡山1-3-1	(1)無尾両生類の肢の再生 (2)アフリカツメガエル <i>Xenopus laevis</i>
学笹倉 靖徳	京都大学大学院動物学教室分子発生研	〒606-8502	京都市左京区北白川追分町	(1)ホヤの母性因子の解析 (2)マボヤ
学水谷 晃子	東海大学医学部分子生命科学Ⅱ	〒259-1193	伊勢原市望星台	(1)マウス初期胚 (2)近交系マウス
学森川 和憲	大阪大学大学院理学研究科生物科学専攻	〒560-0043	豊中市待兼山町1-16	(1)神経冠細胞の起源 (2)ウニ、ヒトデ、ナメクジウオ、ヤツメウナギ
岡崎 尚之	島根県立畜産試験場	〒693-0031	出雲市古志町3775	(1)卵子の成熟、初期胚発生 (2)牛（黒毛和種）
学中野 毅	お茶の水女子大学理学部生物学科	〒112-8610	文京区大塚2-1-1	(1)ヒトデ卵減数分裂再開機構 (2)イトマキヒトデ <i>Asterina pectinifera</i>
学瀬川 浩	理化学研究所脳科学総合研究センター発生分化研究G発生遺伝子制御	〒351-0198	和光市広沢2-1	(1)神経発生 (2)zebrafish
学安達 在嗣	筑波大学大学院生物科学研究科	〒305-8572	つくば市天王台1-1-1	(1)脳の発生と進化に関する遺伝的解析 (2)キイロショウジョウバエ
学大橋 光子	名古屋大学大学院理学研究科生命理学専攻	〒464-8602	名古屋市千種区不老町	(1)軟骨ハターニングにおけるHox遺伝子の標的遺伝子単離 (2)ニワトリLimb

<会員資格変更>

学生→正会員

福田 公子	東京都立大学理学研究科生物学専攻 〒192-0397	八王子市南大沢1-1
石川 仁	三重大学医学部公衆衛生学教室 〒514-8507	津市江戸橋2-174
野村 彰	Aa's Laboratoryバイオイメージングセンター 〒221-0841	横浜市神奈川区松本町6-45-12-404
佐藤 陽子		
小倉 裕範	徳島大学分子酵素学研究センター分子細胞学部門 〒770-8530	徳島市蔵本町3-18-15
利根川あかね	奈良先端科学技術大学院大学バイオサイエンス研究科分子発生生物学 〒630-0101	生駒市高山町8916-5
山本 嘉幸	Dept. of Biology, The Pennsylvania State Univ.	617 Mueller Lab., University Park, PA 16802, U.S.A.
熊倉 雅彦	日本歯科大学新潟歯学部口腔解剖学教室第一講座 〒951-8580	新潟市浜浦町1-8
吉原 基二郎	群馬大学医学部附属行動医学研究施設行動生理部門 〒371-8511	前橋市昭和町3-39-22
太田 一正	東京歯科大学生化学講座 〒261-8502	千葉市美浜区真砂1-2-2
岩井 裕希子	筑波大学生物科学系 〒305-8572	つくば市天王台1-1-1
浦瀬 香子	国立精神神経センター神経研究所疾病研究第5部 〒187-8502	小平市小川東町4-1-1
梅園 良彦	姫路工業大学理学部 〒678-1297	兵庫県赤穂郡上郡町金出地1479-1
美濃川 拓哉	東京大学大学院理学系研究科疾病研究第5部 〒113-0033	文京区本郷7-3-1
榊原 伸一	大阪大学医学部神経機能解剖 〒565-0871	吹田市山田丘2-2
平沼 勉	大阪大学歯学部口腔外科学第一講座 〒565-0871	吹田市山田丘1-8
吉田 道生	熊本大学医学部遺伝発生医学研究施設形態発生部門 〒860-0811	熊本市本荘2-2-1
高木 豪	理化学研究所つくばライフサイエンスセンター 〒305-0074	つくば市高野台3-1-1
荻野 肇	奈良先端科学技術大学院大学バイオサイエンス研究科分子発生生物学 〒630-0101	生駒市高山町8916-5
岡部 正隆	国立遺伝学研究所発生遺伝研究部門 〒411-8540	三島市谷田1111
竹林 公子	大阪大学医学部病理学教室 〒565-0871	吹田市山田丘2-2
猪早 敬二	上智大学生命科学研究所 〒102-8554	千代田区紀尾井町7-1
藤澤 千笑	総合研究大学院大学生命科学研究科遺伝学専攻 〒411-0801	三島市谷田1111 国立遺伝学研究所
種村 健太郎	東京大学農学部獣医学教室 〒113-8657	文京区弥生1-1-1
大川 浩作	信州大学繊維学部高分子工業研究施設 〒386-8567	上田市常田3-15-1
尾身 実	東北大学大学院理学研究科生物学専攻 〒980-8578	仙台市青葉区荒巻字青葉
土田 順司	大阪大学微生物病研究所動物実験学部門 〒565-0871	吹田市山田丘3-1
石井 泰雄	国立精神神経センター神経研究所診断研究部 〒187-8502	小平市小川東町4-1-1
南 相允	東京大学農学部獣医解剖学教室 〒113-8657	文京区弥生1-1-1
鈴木 和美	㈱三菱化学生命科学研究所 〒194-8511	町田市南大谷11
秋山 康子	東京大学理学系研究科物理学教室 〒113-0033	文京区本郷7-3-1
西脇 優子		

楊 仙玉	筑波大学生物科学研究科	〒305-8572	つくば市天王台1-1-1
坂本 尚昭	広島大学理学部遺伝子科学	〒739-8526	東広島市鏡山1-3-1
杉山 仁	上智大学生命科学研究所	〒102-8554	千代田区紀尾井町7-1
町田 修一	東京女子医科大学日本心臓血圧研究所 循環器小児科	〒162-8666	新宿区河田町8-1
遠藤 啓太	Dept. of Cell Biol., Baylor Coll. of Med.		One Baylor Plaza, Houston, TX 7703, U.S.A.
小泉 恵太	LNC, NINDS, NIH		Bldg. 36, Rm. 4D20, 9000 Rockville Pike, Bethesda, MD 20892, U.S.A.
正会員→学生			
竹内 純	奈良先端科学技術大学院大学バイオサイエンス研究科動物代謝調節学	〒630-0101	生駒市高山町8916-5
柴田 由美子	甲南大学理学部生物学科	〒658-8501	神戸市東灘区岡本8-9-1
海外→国内			
刀祢 重信	東京都臨床医学総合研究所放射線医学研究部門	〒113-8613	文京区本駒込3-18-22
二宮 洋一郎	東京医科歯科大学大学院生体機能制御歯科学系発生機構制御学教室	〒113-8549	文京区湯島1-5-45
中山 広樹	山之内製薬㈱分子医学研究所 SEEDS研究室	〒305-0841	つくば市御幸が丘21
国内→海外			
舟橋 淳一	The Salk Inst. for Biological Studies		10010 N.Torrey Pines Rd., La Jolla, CA 92037, U.S.A.
田村 宏治	Gene Expression Lab., The Salk Inst. for Biological Studies		10010 N.Torrey Pines Rd., La Jolla, CA 92037, U.S.A.
米井 小百合	Gene Expression Lab., The Salk Inst. for Biological Studies		10010 N.Torrey Pines Rd., La Jolla, CA 92037, U.S.A.
蛸田中 幹子	c/o Dr. Cheryl Tickel, Dept. of Anatomy & Developmental Biol., Univ. Coll. London		Medawar Bldg., Gower St., London WC1E 6BT, U.K.
黒尾 誠	Dept. of Pathology, The Univ. of Texas Southwestern Med. Ctr. at Dallas		5323 Harry Hines Blvd., Dallas, TX 75235-9072, U.S.A.
山本 嘉幸	Dept. of Biology, The Pennsylvania State Univ.		617 Mueller Lab., University Park, PA 16802, U.S.A.
遠藤 啓太	Dept. of Cell Biol., Baylor Coll. of Med.		One Baylor Plaza, Houston, TX 7703, U.S.A.
小泉 恵太	LNC, NINDS, NIH		Bldg.36, Rm.4D20, 9000 Rockville Pike, Bethesda, MD 20892, U.S.A.
<所属機関変更>			
野呂 知加子	工業技術院電子技術総合研究所超分子部神経個性化ラボ	〒305-8568	つくば市梅園1-1-4
福田 公子	東京都立大学理学研究科生物学専攻	〒192-0397	八王子市南大沢1-1
石川 仁	三重大学医学部公衆衛生学教室	〒514-8507	津市江戸橋2-174
岡本 仁	理化学研究所脳科学総合研究C発生・分化研究G発生遺伝子制御研究T	〒351-0198	和光市広沢2-1
佐藤 陽子	国際力キ遺伝学研究所	〒616-8117	京都市右京区太秦門田町10
佐藤 真	福井医科大学解剖学第二講座	〒910-1193	福井県吉田郡松岡町下合月23

学後藤 利保	京都大学大学院理学研究科生物科学専攻動物学教室発生生物学研究室	〒606-8502	京都市左京区北白川追分町
林 謙介	群馬大学生体調節研究所細胞構造分野	〒371-8512	前橋市昭和町3-39-15
宮谷 精二	キリンビール(株)医薬探索研究所	〒370-1295	高崎市宮原町3
宇野 修正	吉富製薬(株)中央研究所	〒573-1153	枚方市招提大谷2-25-1
野村 彰	Aa's Laboratory バイオイメージングセンター	〒221-0841	横浜市神奈川区松本町6-45-12-404
横田 幸雄	愛知県立大学生物学研究室	〒467-0808	愛知県愛知郡長久手町大字熊張字次ヶ廻間1522-3
鏡味 裕	麻布大学獣医学部動物応用科学科動物資源育種学研究室	〒229-8501	相模原市淵野辺1-17-71
浜野 光市	信州大学農学部附属農場	〒399-4598	長野県上伊那郡南箕輪村8304
小倉 裕範	徳島大学分子酵素学研究センター分子細胞学部門	〒770-8530	徳島市蔵本町3-18-15
深山 昭一	VA Med. Ctr. & Harvard Med. Sch.		Rm. 2B103, Bldg. III, 1400 VFW Pkwy., West Roxbury, MA 02132, U.S.A.
石原 朋子	c/o Dr. D. Herzlinger, Dept. of Physiology, Cornell Univ. of		1300 York Ave., New York, NY 10021, U.S.A.
学野村 和子	九州大学理学部生物発生生物学教室	〒812-8581	福岡市東区箱崎6-10-1
学山口 雅裕	北海道大学理学部生物科学科生体情報分子学講座 I	〒060-0810	札幌市北区北10条西8丁目
渥美 忠男	理化学研究所ライフサイエンス筑波研究センター分子細胞生物学研究室	〒305-0074	つくば市高野台3-1-1
石田 幸子	弘前大学理工学部生物学教室	〒036-8561	弘前市文京町3
刀祢 重信	川崎医科大学学生化学 I	〒701-0192	倉敷市松島577
西岡 みどり	広島国際大学保健医療学部臨床工学科	〒724-0695	広島県賀茂郡黒瀬町学園台555-36
隅田 寛	広島国際大学保健医療学部診療放射線学科	〒724-0695	広島県賀茂郡黒瀬町学園台555-36
利根川あかね	奈良先端科学技術大学院大学バイオサイエンス研究科分子発生生物学	〒630-0101	生駒市高山町8916-5
稲葉 一男	東北大学理学部附属臨海実験所	〒039-3501	青森市浅虫坂本9
伊藤 弘樹	理化学研究所ライフサイエンス筑波研究センター分子遺伝学研究室	〒305-0074	つくば市高野台3-1-1
伊藤 啓二	Molecular Medicine Unit, Beth Israel Deaconess Med. Ctr., Harvard Med. Sch.		Brookline Ave., Boston, MA 02215, U.S.A.
若松 義雄	Inst. of Neurosci., Univ. of Oregon		Eugene, OR 97403-1254, U.S.A.
芋川 浩	Dept. of Biochemistry & Molecular Biol., Univ. Coll. London		Gower ST., London WC1E 6BT, U.K.
下野 明彦	The Univ. of Texas, M. D. Anderson Cancer Ctr., Molecular Genetics		Box 45, 1515 Holcombe Blvd., Houston, TX 77030, U.S.A.
古田 泰秀	Dept. of Cell Biol., Vanderbilt Univ. Med. Ctr.		1161 21st. Ave. South, U-2219 MCN, Nashville, TN 37232-2175, U.S.A.
学安西 弘子	理化学研究所ライフサイエンス筑波研究センター分子細胞生物学研究室	〒305-0074	つくば市高野台3-1-1

(学)益田 浩子	京都大学大学院医学研究科生体構造医学講座	〒606-8501	京都市左京区吉田近衛町
今井 裕	京都大学大学院農学研究科応用生物科学専攻	〒606-8502	京都市左京区北白川追分町
野澤 資亜利	聖マリアンナ医科大学泌尿器科	〒216-8511	川崎市宮前区菅生2-16-1
館 鄰	麻布大学獣医学部動物応用科学科動物工学研究室	〒229-8501	相模原市淵野辺1-17-71
石黒 誠一	弘前大学農学生命科学部応用生命工学科細胞工学講座	〒036-8561	弘前市大字文京町3
岩間 久行	国立精神・神経センター神経研究所疾病研究第三部	〒187-8502	小平市小川東町4-1-1
近藤 壽彦	群馬大学医学部保健学科・基礎検査学	〒371-8514	前橋市昭和町3-39-15
西松 伸一郎	川崎医科大学分子生物学教室	〒701-0192	倉敷市松島577
高橋 淑子	奈良先端科学技術大学院大学バイオサイエンス研究科分子発生生物学	〒630-0101	生駒市高山町8916-5
塚原 正俊	明治乳業ヘルスサイエンス研究所海外素材研究室	〒250-0862	小田原市成田540
石井 泰雄	国立精神神経センター神経研究所診断研究部	〒187-8502	小平市小川東町4-1-1
小林 麻己人	筑波大学基礎医学系	〒305-8575	つくば市天王台1-1-1
(学)齋藤 実	㈱広島県産業技術振興機構広島県組織再生プロジェクト	〒739-0046	東広島市鏡山3-10-32

<退会者>

岡田 稔	舟橋 久幸	三川 隆	伊藤 寿朗	外岡 資朗	松尾 隆嗣	吉川 徹
大滝 哲也	安藤 覚	岩田 博司	池田 幸弘	荒木 剛	伊藤美樹子	野村 一也
藤森 俊彦	國枝 武和	伊勢 直人	高橋 善彦	前田 龍	勝倉 由樹	清水 健
堤 陽子	宮川 照美	千葉奈緒子				

〔賛助会員〕

研究者のニーズにハートで応える(株)池田理化	〒101 千代田区鍛冶町1-8-6神田K Sビル T E L 03-5256-1051
(有)共進理工“細胞分別”ナイロンメッシュ	〒113 文京区本郷5-13-1ドエル本郷205 T E L 03-3813-1073
生命誌研究館	〒569 高槻市紫町1-1 T E L 0726-81-9750
先端テクノロジーをサポートする日京テクノス(株)	〒113 文京区本郷2-17-8鈴木ビル T E L 03-3814-2066
三菱化学生命科学研究所	〒194 町田市南大谷11 T E L 0427-24-6226
明治乳業(株)ヘルスサイエンス研究所	〒250 小田原市成田540 T E L 0465-37-3661

日本発生生物学会への入会について

同封の「申し込み票」および「会員カード」に必要事項を御記入の上、日本学会事務センター宛お届け下さい。

ご参考までに学会事業の内容をお知らせ致します。

a) 学会誌の刊行

Development, Growth & Differentiation

年1巻、6冊刊行

b) 年1回、研究発表のほか、招待講演、シンポジウムなどがあり、また、会則による総会が開かれます。大会講演要旨集が予め全会員に配布されます。

c) インフォメーション・サーキュラー

大会の予告、予算案、決算、運営委員会の報告など、学会の事業の連絡やその他会員の消息、関連学会の動きなどを登載したサーキュラーが年3～4回配布されます

d) 和文単行書の編集

学会内の委員会の企画により、単行書を編集し刊行しています。会員は（刊行後一定期間に限り）割引価格で購入できます。既刊分は「発生における制御」「初期発生における細胞」「エイジングの生物学」「動物の器官形成」「受精の生物学」「変態の生物学」「発生における分子識別」です。

なお、会費は前納制です。前年度末までに、次年度の会費をご納入下さい。

会費、発送物、入退会、住所変更に関する問い合わせ先は

〒113 東京都文京区本駒込5-16-9 学会センターC21

(財)日本学会事務センター 日本発生生物学会 係

TEL 03-5814-5810

学生の方は、学生証のコピーを添付して、お申込み下さい。

なお学生資格は、学部学生、大学院生、及び大学、研究所等で、学生証あるいはそれに準ずる証明書を有する学生、研究生等です。

----- 切 り 取 り 線 -----

日本発生生物学会入会申し込み票

(年 月 日)

氏名	氏名ローマ字綴り (フル・ネーム)
研究主題 (もしくは関心のあるテーマ)	所属機関名とその所在地 (電話 内線) (〒)
研究材料名 (和名・学名など)	(ファックス) e メールアドレス 上記以外に連絡を希望される場合の連絡場所 (自宅の場合は自と記入のこと) (〒)
会への要望	

(I) 会員カードの記入要領

1. 会員カードはすべてコンピューターに記憶させますので楷書ではっきり記入して下さい。また指定箇所には、「フリガナ」または「ローマ字」で記入して下さい。
2. 氏名は点線の左側に姓、右側に名を記入して下さい。
3. 郵便番号は所定の欄に記入して下さい。
4. 所属機関の名称は原則として、大学の場合には学部・学科まで、会社等の場合には部・課までを記入して下さい。
5. 学歴は最終卒業学校名、卒業年（西暦）を記入して下さい。
修士・博士課程在学中の方は研究科、課程まで、学部在学中の方は在学学校名、在学学年を記入して下さい。
6. 性別・専門・連絡先（＝会誌等送付先）・会員種別については、該当するものを○でかこんで下さい。
7. 本会の会計年度は、1月～12月です。入会年度を所定の欄に必ず記入して下さい。
8. ＊印の欄には記入しないで下さい。

(II) 会費の送金方法について

1. 会員カードを返送していただいてから1か月以内に請求書を発行しますので最寄りの郵便局または銀行よりお振り込み下さい。

(注) 現住所、所属機関等、会員カードの記載事項に変更があった場合はただちに、書面でご連絡下さい。

入会申込書は必ずご返送下さい。

財団法人 日本学会事務センター

日本発生物学会会員係

〒133-8622 東京都文京区本駒込5-16-9

学会センターC21

TEL 03-5814-5810

広告掲載のお願い

日本発生生物学会は理学，医学，薬学，農学をはじめ分子生物学，細胞生物学，遺伝学など，さまざまな生物学分野で発生生物学の基礎研究に興味を持つ内外の研究者によって組織されている学会であり，国内外に約1,300人の会員を持っております。

英文学術雑誌 *Development, Growth and Differentiation* は，日本発生生物学会の機関誌で年6回発行し，国内に約1,200部，国外に約600部配布致しております。また会員にはインフォメーション・サーキュラーを年3回配布致しております。

目下，本学会では広告主を募っております。会員各位におかれましても広告主のご紹介等，是非ご協力頂きますようお願い致します。

広 告 料			
D G D 本誌	1 頁	年 6 回	150,000円
	半 頁	〃	78,000円
インフォメーション	1 頁	年 3 回	90,000円
サーキュラー	半 頁	〃	45,000円

尚、サーキュラー用の版下作製代は実費をいただきます。裏表紙は1頁10,000円高となります。

申し込み先：日本発生生物学会事務局（八杉貞雄）

〒192-0397 八王子市南大沢1-1

東京都立大学大学院理学研究科生物学教室

TEL 0426-77-2572(直通) FAX 0426-77-2559

----- 切 り 取 り 線 -----

広告申し込み書

年 月 日

日本発生生物学会 御中

広告の掲載をお願いしたく下記の通り申し込みます。

☐ D G D 本誌	1 頁
☐ 〃	半 頁
☐ サーキュラー	1 頁
☐ 〃	半 頁
住 所	
会 社 名	
担当者名	
電話番号	

印

賛助会員へのご入会のお願い

日本発生生物学会

会長 岡田 益吉

近年、ライフサイエンス、バイオテクノロジー等の言葉が広く語られ、生物学に大きな関心と注目が払われるようになってまいりました。

日本発生生物学会は、発生生物学の進歩と普及をはかるため設立された学会で、日本を主に、外国の発生学者を混じえて約1,300名を結集しております。発生学は、言うまでもなく医学・農学等の諸分野とも深い関連を有しており、最近とみに進展の著しい遺伝情報発現をめぐる諸問題、癌細胞の基礎的研究、老化の問題等も発生生物学の大きな関心の的になっております。日本発生生物学会は、これらの分野での活発な研究者を会員としております。又、本学会の刊行致しております欧文誌“Development, Growth and Differentiation”(DGD)もこの方面の国際的学術雑誌として高く評価されております。

貴社におかれましては、このような学問の重要性をすでに御承知のことと存じます。何卒、本学会趣旨に御賛同の上、賛助会員として本会を御支援賜りますようお願い申し上げます。

なお、賛助会員は年3回発行される「インフォメーション・サーキュラー」誌上に特記され、本会の刊行する欧・和文刊行物(会員名簿を含む)が配布されます。会費は、一口三万円を申し受けております。御入会の際は、入会申込書を事務局までお送り下さい。

連絡先：日本発生生物学会事務局(八杉貞雄)

〒192-0397 八王子市南大沢1-1

東京都立大学大学院理学研究科生物学教室

TEL 0426-77-2572(直通) FAX 0426-77-2559

-----切-----り-----取-----り-----線-----

日本発生生物学会賛助会員入会申込書

年 月 日

賛助会員として入会の申し込みを致します。

(_____ 口 _____ 円)

住 所

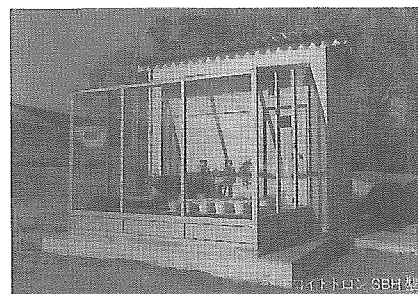
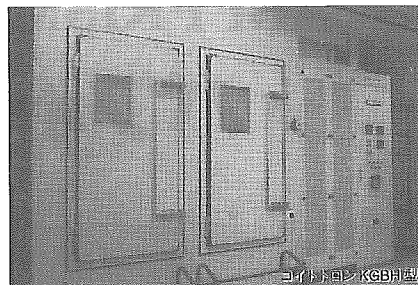
会 社 名

担当者名
電話番号

㊞

バイオ関連の試験・研究を バックアップ

小糸工業のバイオハザード対応グロースキャビネットは、周囲環境の影響を受けずに、圧力コントロールシステムで実験室内を陰圧に保持します。また、コンパクトで高性能なフィルターユニットとの組み合わせで、実験対象物への空気流による外界からの悪影響を遮断、簡単操作をプラスして、高精度な温・湿度を再現します。



バイオハザード対応グロースキャビネット
コイトトロン **SBH/KGBH** シリーズ

小糸工業株式会社 東京本部 〒108 東京都港区高輪3丁目5番23号(日生高輪台ビル) ☎03(3443)9846 FAX.03(3443)6570
札幌 011(722)5211 東北 022(225)7501 大阪 06(263)6371 九州 092(431)0838 筑波 0298(51)2311 沖縄 098(861)1805

講談社の自然科学専門書

英語論文セミナー 現代の発生生物学

丸山 工作 監修/浅島 誠・大日方 昂・松田 良一 編集

A4・174頁・本体価格3,398円

現代発生生物学の展開を英語論文でたどる。ゲノムの不変性を示した核移植の論文から、細胞接着、ホメオボックス遺伝子、アポトーシス、細胞分化誘導因子など、発生生物学の新しいテーマを扱った論文を紹介。

英語論文セミナー 現代の細胞生物学

丸山 工作 監修/馬淵 一誠・山本 正幸 編集

A4・174頁・本体価格3,398円

英語論文で解き明かす現代細胞生物学の真髄。細胞運動の分子装置と細胞骨格、シグナル伝達とがん遺伝子、細胞膜における受容体やチャネルの働きなど、ますます発展する細胞生物学の核となる論文を紹介する。

英語論文セミナー 現代の分子生物学

丸山 工作 監修/渡辺 公綱・桂 勲 編集

A4・174頁・本体価格3,400円

この一冊で珠玉の英語論文がスラスラ読める。現代分子生物学にインパクトを与えた論文18編を精選し、第一線の研究者が解説と訳注を執筆。遺伝子発現、RNAワールド、分子シャペロンなど興味深いテーマを満載。

※上記本体価格に消費税が別に加算されます。

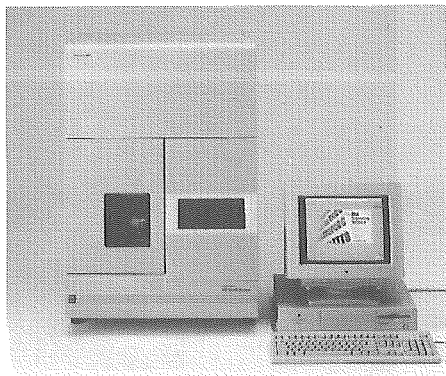
東京都文京区音羽2-12-21
振替 東京 8-3930

講談社

編集部 ☎03(3235)3701
販売部 ☎03(5395)3624

ABI PRISM™ 310 Genetic Analyzer

パフォーマンス UP!



DNAシーケンシング&DNAフラグメント解析

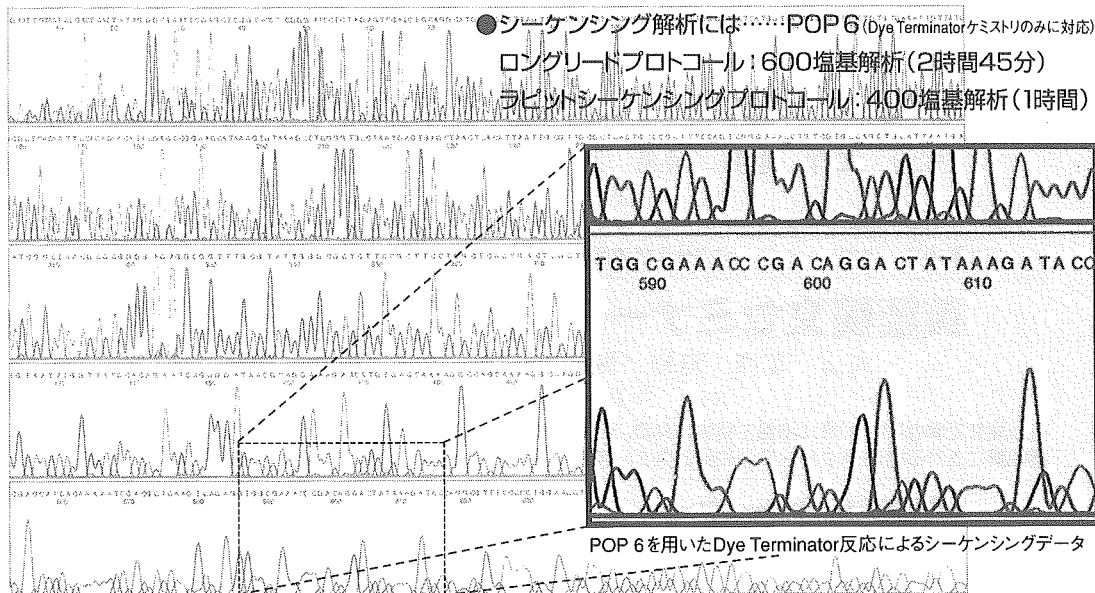
ABI PRISM™ 310ジェネティックアナライザは、多色蛍光標識技術とキャピラリー電気泳動技術を統合した、サイズ決定・定量などの遺伝子解析および核酸の配列解析を行える、初めての自動システムです。デビュー以来、多くの施設に導入され、ご好評を頂いています。このたび、新しいポリマー “Performance Optimized Polymer (POP)” を開発し、より良好な結果を手にして頂けるようになりました。

New

新ポリマー POP 4 & POP 6 登場

●GeneScan™ 変性条件系フラグメント解析 (STR, micro-satellite, AFLP, differential display等) には……POP 4

●シーケンシング解析には……POP 6 (Dye Terminatorケミストリーのみに対応)
 ロングリードプロトコール: 600塩基解析 (2時間45分)
 ラビットシーケンシングプロトコール: 400塩基解析 (1時間)



PE Applied Biosystems

株式会社 パーキンエルマー・ジャパン
 アプライド バイオシステムズ事業部

本 社 ●〒279 千葉県浦安市美浜1-9-2
 名古屋 ●〒464 愛知県名古屋市中千種区池下町2-15
 大 阪 ●〒564 大阪府吹田市豊津町5-3
 福 岡 ●〒810 福岡県福岡市中央区赤坂1-16-10

☎047 (380) 8500/FAX 047 (380) 8505
 ☎052 (764) 1201/FAX 052 (764) 1202
 ☎06 (389) 1201/FAX 06 (389) 1206
 ☎092 (771) 2755/FAX 092 (771) 2756

URL address <http://www.perkin-elmer.com/ab>

生細胞の染色に

細胞蛍光標識キット

Cell Linker Technology に基づく細胞染色法で、細胞膜に高親和性を持つ新しいタイプの蛍光色素PKH2またはPKH26 蛍光色素と希釈液とを組み合わせた、細胞蛍光標識キットです。

細胞機能に影響しません

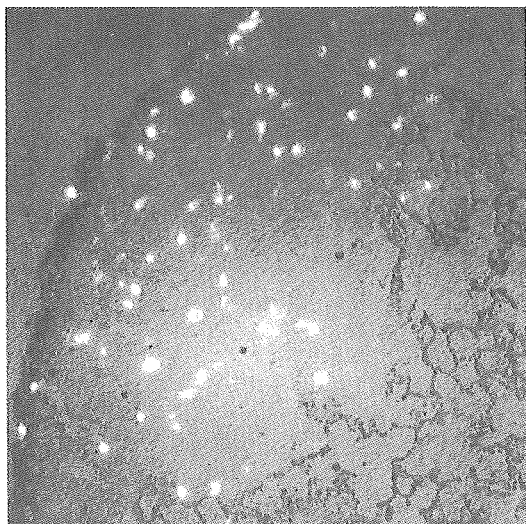
細胞と数分間混合するだけで、生細胞をその機能を損うことなく染色可能で、細胞の移動や増殖のモニタリングに大きな威力を発揮します。

簡便です

従来 ^{51}Cr 等を用いて行われていた LAK 細胞のモニタリングや NK 活性の測定が簡便に、しかも安全に行うことができます。

安定です

ウサギ赤血球を標識した場合、PKH26 では *in vivo* でその溶出の半減期が100日以上を示し、長期のモニタリングが可能です。



Tumor Localization of PKH26 Labeled TILs.

マウス肺癌組織に浸潤している、PKH26 で染色した IL-2 処理リンパ球が観察されます。

Photo Courtesy of
Drs. Per Basse & Ronald H. Goldfarb
Pittsburgh Cancer Institute, Pittsburgh, PA

発売元



大日本製薬株式会社
ラボラトリー プロダクツ部

〒564 大阪府吹田市江の木町33-94
TEL 大阪 (06) 386-2164(代表)
東京 (03) 3828-6544(代表)

アフリカ ツメガエル

澄んだ空気、汚染のない川、
沼の水等、恵まれた自然環境
の下で育った良質のアフリカ
ツメガエル。

使用目的：遺伝子組換、動物
クローン研究、細胞操作、イ
ンターフェロン培養、教材と
して生理・解剖実験に御使用
下さい。

（当養殖場では、水道水を一
切使用しておりません。）



— お 問 い 合 わ せ は —

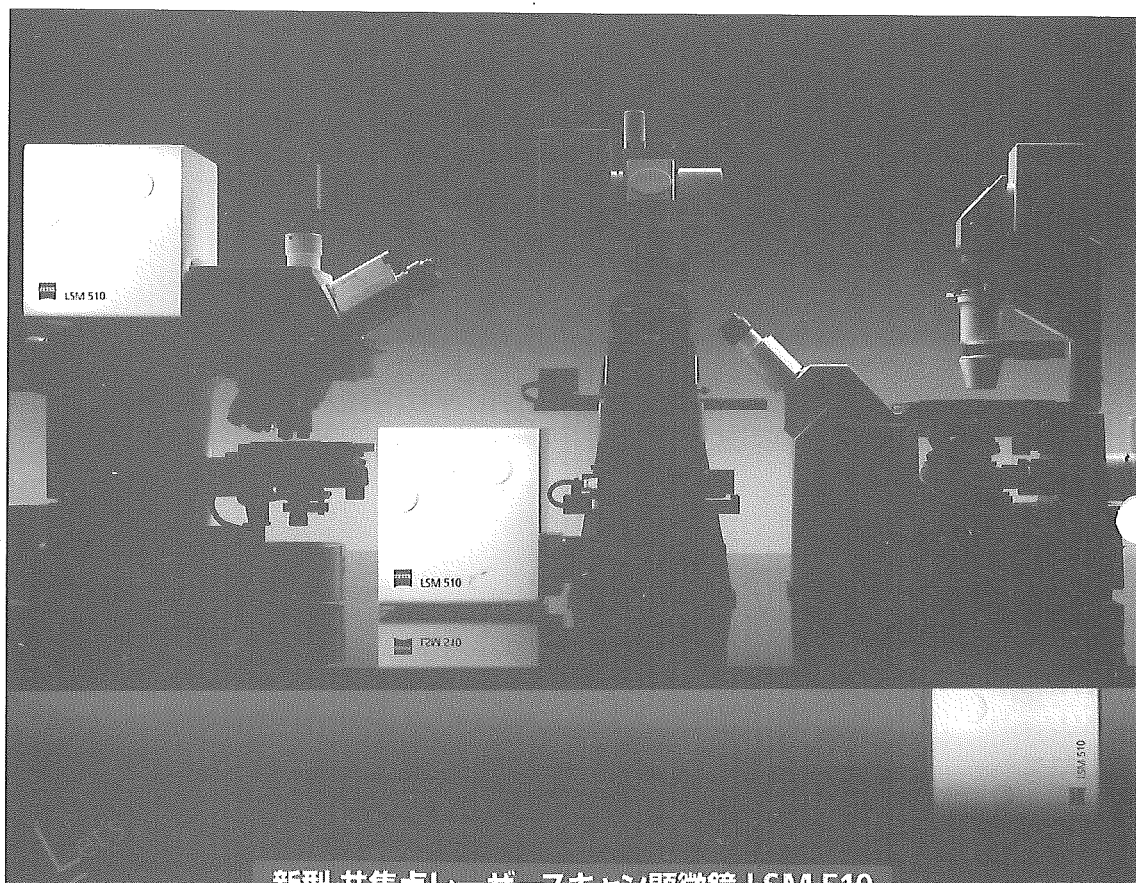
養殖
販売 **北日本生物教材**
代表 **三 上 正 義**

フリーダイヤル セノバスはクローン
0120-084896
（午前発注：即日発送）（月～金曜日：午前9時～午後5時）

〒036-15
青森県中郡相馬村大字坂市沢113
TEL 0172 (84) 3509
FAX 0172 (84) 3510

•••••Memo•••••

Memo



See
More

新型 共焦点レーザースキャン顕微鏡 LSM 510

コンパクトそして多機能

一点の妥協もなく

あなたが評価するのは柔軟な対応力ですか？それとも最高のテクノロジーでしょうか？

LSM510は、その全てを備えています。

革新的な最高の技術、極めて扱いやすいソフトウェアがもたらす抜群の操作性、コンパクトで交換容易なスキャンングモジュールなど。徹底した妥協を許さない物作りの精神が、ここにあります。

斬新なスキャンング手法

極めてユニークなスキャンング法を採用、スキャンングエリアの設定も自由自在。従って、思いのままの不定形のスキャンが可能です。全ての3D表示、各種測定法と相まって、試料情報を余すところなく表現します。

かつて、顕微鏡に抱かれていた様々な期待が、今ここに実現します。

新しい品質基準の画像

蛍光の4ch、同時取得、各ピンホールはコンピュータコントロールされ、2,048×2,048ピクセルの高精細スキャン、4×12bitの高分解能をはじめとして、積算、オーバサンプリング、フォトンカウンティングなど、LSM510の諸機能は、全て研究者への奉仕にあります。



ドイツ ツァイスグループ
カールツァイス株式会社 顕微鏡部

〒160-0003 東京都新宿区本塩町22番地
☎03-3355-0332 Fax.03-3358-7554

大阪☎06-282-4322 名古屋☎052-777-1411
福岡☎092-713-7821 仙台☎022-224-5621